

平成29年度

地域福祉フォーラム

「津久井やまゆり園事件の検証と保護者・職員のあり方」

～なぜ実名報道がなされなかったのか、その背景はなにか～

記 録



平成30年3月25日（日） 午後1時

南砺市福野文化創造センター ヘリオス

手をつなぐ育成会となみ地域連合会
社会福祉法人 手をつなぐとなみ野

目次

はじめに

目的と日程	1
基調講演 記録	2
参考 津久井やまゆり園での事件について(障害のある皆さんへ).....	1 5
パネルディスカッション 各氏からの提言	1 6
参考 野沢和弘氏の社説	3 2
パネルディスカッション 意見交換	3 4
学校プロジェクト・キャラバン隊「ぱすてる」紹介	4 8
参加者のアンケート	4 9
参考 北日本新聞の記事	5 6

おわりに

目的

平成28年7月26日に起きた、相模原市の障害者支援施設「津久井やまゆり園」での障害者殺傷事件から1年半が経過しました。

「障害者はいなくなればいい」という身勝手な犯行で19人の命を奪い、職員も含め27人に重軽傷を負わせた犯行は、障害を持つ本人、保護者、そして障害福祉サービスに携わる職員・関係者はもとより、社会に大きな衝撃を与えました。

この事件に関しては様々な議論がなされましたが、その方向は施設等の警備対策の強化や、精神障害に起因する特殊な事件として取り上げられました。

しかし、果たしてそのような事件だったのでしょうか。私たちは「なぜ実名報道がなされなかったのか、その背景は何か」に疑問を感じるとともに、障害者に対する偏見や差別、弱者の切り捨てなどを憂慮しています。

このフォーラムを通して、障害を持つ子の親として何ができるのか、何をすべきなのか、今一度見つめ直す機会としたい。

障害のあるなしに関わらず、人としてこの世に生を受け、かけがえのない一人としての尊厳を護られながら、生き抜くこの子らのために。

日程及び内容

13:00 受付

13:20 開会挨拶

13:30 基調講演

講師 全国手をつなぐ育成会連合会 会長 久保厚子
演題 「津久井やまゆり園事件を通して考える」

14:40 パネルディスカッション

パネリスト

全国手をつなぐ育成会連合会	会長	久保厚子
全国手をつなぐ育成会権利擁護委員	弁護士	関哉直人
毎日新聞論説委員		野沢和弘
知的障害者団体代表		穴田 清

コーディネーター

富山国際大学子ども育成学部	教授	村上 満
---------------	----	------

16:40 質疑応答

17:00 終了

第1部 基調講演

全国手をつなぐ育成会連合会 会長 久保厚子 氏

津久井やまゆり園事件を通して考える

全国手をつなぐ育成会連合会
会長 久保 厚子

福祉フォーラム2018(2018-03-25)

皆様こんにちは。今紹介にあずかりました全国手をつなぐ育成会連合会の会長を務めさせていただいています久保でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は「やまゆり園事件を通して考える」という題でお話しさせていただきます。

いつも事前にお断りしているのですが、私は特別に偉い人でも、力量があるわけでもありません。今年43才になる障害のある息子がいる、ただのお母ちゃんです。ですから難しいお話はできないんです。ただ、親の目線で考えていることをお話して、皆さんと一緒に、これから先のことを考え合って、前へ進めて行けたらいいなあと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

皆さんよくご存じの津久井やまゆり園ですね。重度の障害の方がとても多い施設だと言われています。でも、私どもの施設よりも、このやまゆり園ほうがもう少し軽い方もおられるなあ



津久井やまゆり園 2016年7月26日未明
午前2時から3時
19名死亡
27名重軽傷
重度の障害者

福祉フォーラム2018(2018-03-25)

2

- 手紙は、A4サイズのレポート用紙数枚に
- 「保護者の疲れ切った表情、職員の生気の欠けた瞳」
- 「障害者は不幸を作ることしかできない」
- 「私の目的は重複障害者の方が家庭内での生活及び社会生活が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です」
- 「ここで470人を抹消することができる」

強い偏見、差別、優生思想、存在否定、等

福祉フォーラム2018(2018-03-25)

3

という気はしています。このような施設で起こった残忍な事件です。

犯人は衆議院議長にお手紙を持って行ったんですね。その手紙は報道されていますので、よくご存じだと思います。

この法人は、2つの大きな施設を運営していたので、併せて470人くらいになるわけです。

左図のように、重度の障害者はこの世にいない方がみんなが幸せなんだという考え方で犯行に及んだわけですね。非常に強い偏見、差別、優生思想の考え方の行動だなあと思います。

で、この報道がされてすぐに連合会に本当にたくさんの電話だとか、メールだとか、手紙、はがき、ファックスなどいろいろなもので声が寄せられました。

特に重度の人よりも、中軽度の人の方がこの事態をよく理解できています。企業に勤めている方も、もう行くのが怖い、ということも言ってこられました。分かっている方は「殺されるの?」と言っておられます。職員の名前を言って「信用していいの?」と家で親に話したという声も届けられました。

「どうして生きていけばいいのか分からない」とおっしゃられもしています。私たち普通に厚かましく生きているようではあります。親って、ちょっと、なんとなく世間やいろんな所で我が子がお世話になっている、迷惑をかけているという気持ちがありますよね。だから、何かしらないけど、ちょっと遠慮するという、何かあったらすぐに「すみません、すみません」と言ってしまおうとか、そんな感覚が私たち親の中にあります。この言葉はそういうことをおっしゃっていると思います。そのように生きているのに、それでもまだ、こんなことをされるんだとしたら、私たちはどうして生きていけばいいんですか。と問いかけておられるんだと思います。「存在を否定されて悲しい」という声もいただきました。

容疑者の言葉に不安の声

○障害のある本人たちや家族からの不安の声が多く寄せられる。

「怖い」「家から出られない」「周りの目が怖い」
 「お母さん、僕殺されるの?」
 「毎日通っている〇〇事業所の支援者を信用してもいいの?」
 「私たち親はいつも少し遠慮して暮らしているのに、こんな事件が起きて、これからどうして生きて行けばいいのか分からない」
 「我が子の存在が否定されて悲しい」

福祉フォーラム2018-2018-03-25

4

課題を再確認させられた声

<寄せられた声の中には>

- あんたたちの子どもは、社会の為に何の役にも立っていないよ。
- 役に立たない者に税金を使うな。
- 偉そうなことを言うな。迷惑だ。
- 自分が誰かも分かっていない者は必要ない。
- 重度障害者の姿を見るのも嫌だ。
- 障害者は邪魔なだけだ。死ね!

• ネット上でも同様の声が多量に飛び交っている。

• ハイトスピーチ、ハイトクライムにどう対応するかが課題です。

福祉フォーラム2018-2018-03-25

5

事務所に合計で300くらいのメールやファックスが寄せられたんですけど、その中で、1割弱ですが犯人と同じような意見が結構たくさんありました。私たちがメッセージを出したりしたのがマスコミで取り上げられたことを指して「迷惑」と言っておられるのだと思います。

自分の名前が言えない、年が言えない、住所が言えないという人は「自

分が誰かも分かっていない人」なので、そういう人は必要ないということなんですね。そして、重度の方の「姿を見るのも嫌なんだ、見るのも嫌だからいない方がいいんだ」という考えなんですね。そして、「邪魔だ、死ね!」です。

事務所に電話がかかってきて、頑張れっていう声ばかりならいいんですけど、こういう声もちょこちょこあって、なんだかんだ言われるので、女性の事務職員がしんどくなって、2・3日お休みしたことがあります。それで、私の携帯番号を教えました。何人かと直接お話をしました。1時間半くらい話をしましたが、平行線です。私たちと那些人たちとは感覚というか、思いが全然違う。どれだけ話してもお互いに理解できないんですよ。何でそんなふうなことを思うだろうと思うくらいのことをおっしゃいますよね。

人を人と見ていないんですよ。本当にね、自分が強い立ち位置におられるという意識がある。でも、自分も年を重ねたら障害者と同じような状態になっていくことに気づいておられないんだと思います。だからいくら話をしても平行線です。それで、黙って聞いていると「聞いているのか」と怒られましてね。適当に話をしながら終わったという方が3人ほどおられました。

そんな声がネット上では本当にたくさん当時は飛び交っていました。今もまだ似

・差別意識の強い特異な事件である。

- ・この事件は、どのような背景があったとしても決して許されることではない。
- ・障害者の命を自分と同じ価値のある命と見ていない考えです。
- ・障害があっても、与えられた環境のなかで精一杯前向きに生きている人たちです。
- ・どんなに障害が重くても、生きる価値と権利は誰にでもあります。

・淘汰すべき命など、決してない。

福祉フォーラム2018/2018-03.25

6

たような意見がネット上にあります。ヘイトスピーチみたいなものにどう対応すればいいのか、これからの課題だなあとということを再確認させられた事件であり時期でもありました。

与えられた環境の中で精一杯彼ら、彼女らは生きていますよ。そして、人生を楽しむ権利も彼らにはあるわけ

です。

最近はですね、動物でも無駄に殺すとか、虐待するとか、すごく話題になっていますけども、私たちの子は障害があっても同じ人間ですから、同じように一人の人として、尊厳をもってみていただきたいと思っています。

私は滋賀ですので、滋賀は福祉先進県だからとよく言われるんですけど、その滋賀であっても、グループホームを作りたいと言ったら、反対運動ありますよ。誰が反対しているのかって職員に聞くと、元警察官、元学校の先生、そして私が一番腹が立ったのは、成年後見やりますって看板を挙

げている司法書士です。そんな人に成年後見になってもらいたくないなと思いますよね。その人は、グループホーム自体はいいんだけど、うちの近くに来るのは嫌だって言って、他の住民より大きな声で反対するわけですね。世の中どうなっているのかと思いますけれども、その人に成年後見の看板挙げるの止めてほしいと私は思いますね。

差別やいじめも根っこは同じだと思います。もっと言えば、私たち親の中にもあると思います。私たちは子供が学校とか、事業所とかに連れて行ったり迎えに行ったり、また、用事ごとがあつて行ったりします。その時に、自分の子と他所の子を見て、うちの子はあの子よりましだ、って思ったことはありませんか、と聞くんです。そうすると皆さんにやにやと笑ったり、頷いたりされます。私も経験あります。私もそういう思いをした時期があります。みんなあると思うんですよ。比べて優劣をつけているということなんです。

障害者の親である私たちでさえ無意識にそういうことをやっちゃっているんですね。だから、家族にそういう方がいない人だったら、無意識の中に差別的意識があっても全然不思議じゃないと思います。ということは、国民の皆さんみんなの中に、なにがしかそういう要素がある。このことを踏まえて私たちは活動しなければならないなと思います。

国民の意識にも

- ・強者、優生者の立場から現れる障害者排除の意識があります。
- ・国民の多くには、まだまだ障害者は自分たちとは別の存在との意識が多い。
- ・グループホームや事業所の開設反対も同種の意識からだといえます。
- ・各地の施設、事業所、学校でおこる虐待や差別事件も根っこは同じだといえます。

福祉フォーラム2018/2018-03.25

7



それで、犯人と同じような方とお話をしても平行線ですので、手をつなぐ9月号に写真をいっぱい載せたわけです。これはもう正直言って、そういう人たちと向き合って正論で話をしても通じないわけですから、また、無関心な方もいっぱいおられるわけですから、短期間でしたが、笑顔の写真をいっぱい出してくださいって提供していただいたものなんです。

こんなに笑顔で仲間や家族と暮らしているこの人たち、いなくていい存在だと思いますか、という投げかけなんです。そういう意味で、この「手をつなぐ」に写真をいっぱい載せさせていただいたんです。

皆さんご存じのように、育成会はお金がありませんから、いつもは表紙だけがフルカラーで中身は2色づりになっています。しかし、この号だけは全部フルカラーにして、各ページにいっぱい笑顔の写真を載せさせていただきました。それは、こんな彼ら彼女らがいなくていい存在だと思いますか、殺されていい存在だと



と思いますか
ということ
を訴えて、
気づいてほ
しいという
思いで作ら
しました。

1ページ
を開くとこ
んな感じだ
す。「だい
じょうぶ、
手をつなご
う」ってい
うので、大

変ショックな事件があったけれども。でも、私たち家族は障害のある本人たちを守

りながら、そして、安心できる社会を作っていきたいんだ、ということメッセージとして載せさせていただいています。(講演会記録の最後に再掲)

写真と一緒にメッセージもいただきましたので、紹介します。「成人式……」の方は進行性ですから、今も車椅子で、帯を前で結んで、そういう写真を提供して下さったんです。写真屋さんで家族みんな笑顔でとっておられました。

もっともっとたくさんのメッセージをいただいているのですが、こういうメッセージを皆さんにお伝えすることで、家族の気持ちをお伝えすることも私たちがしていかなければならないことと持っています。

自己紹介が遅れましたが、私の一番上の長男が重度の障害で、下に娘が二人います。二人とも嫁に行き孫もいるそういう家族です。

息子は先天性十二指腸閉塞でして、生まれた時から血をどんどん吐いていました。そして3日目で手術をして、その時にはもう障害があるということは分かっていたので、お医者さんはもう98%、99%助からないと思う、だから、手術をなさなくていいことはおすすりできないので、ご両親でどうするか決めてくださいって言われました。

目の前で保育器に入っている息子はですね、鶏ガラのようになっているけれども、一所懸命生きようとしているんです。ここで手術はしていませんという、息子はもう完全になくなってしまふわけですね。私たちは、たとえ1%でも可能性があるんだしたらそれに賭けようと思いました。

私たち自身あのとき手術をしてあげていたら助かったかもしれないのにという後悔をずっと抱きながら生きていくのも嫌だと自分たちのためにも息子のためにもということで手術をしていただきました。今年43才。元気で生きてます。去年の夏に心臓の手術をしましたけれど、その山も乗り越えて、元気で暮らしています。そういう意味で、私自身は本人の一所懸命生きようとしているその力を信じたいと思います。

去年の6月くらいに小児神経学会という学会でやまゆり園の話をしてほしいというので、お話しさせていただいたのですが、やっぱりお医者さんは、どうせ助けても重度の障害があるんだから、もう何もしないで、このままの方がいいのではないかと悩む、とおっしゃいました。私は、「そこで悩まないでほしい」と言いました。うちの息子は1%の確率に賭けて命が助かった。そして、今でも元気にいる。確かに重度の障害ですよ。区分6ですから、言葉もないし、排泄も知らせられないし、生活のなか全部に介助が必要ですから。そんな息子ですけど、家族の中心ですよ、障害のある子って。息子が家にいるときは彼を中心に家の中が回っている感じです。それで、息子がいるからこそ面白い、楽しいこともいっぱいあるわけですよ、今でも。そういうふうにして家族ができていくということもあります。だから、お医者さんは、医療を施すことで命を助けることが使命なのだから、悩まないでほしい。(命

写真を投稿した方のメッセージ

- 笑顔で、私たちの幸せを伝えることができるんだと思った。
- 先生から、二十歳まで(生きるの)は無理じゃないかと言われていた。成人式を迎えて、着物を着て写ることは、これだけの笑顔が出る、家族みんなが笑顔になれるだけのうれしいことなんだと伝わればいい。
- いままで、色んなことがありました……。これからも、色んなことがあると思います。でも、この子が生まれて私たちは幸せです。

- できない事を辛いと嘆くより、できた事を喜んで笑っていることが多い気がします。沢山の優しさを知ることができ、私たちは幸せです。
- 私の長男も重度で重複障害です。おまけに難病もあります。でも、私は日本一幸せにしてあげたいと思って今日まで育ててきました。辛い時もありましたが、あの子の笑顔に支えられてきました。
- 事件は、私たち支援者への信頼をも傷つけたと思います。しかし、私たちは、利用してくれる方の最高の笑顔を見ようと日々実践しています。今後もその決意に変わりはありません。

撮影：5月2018年03月20日

44

を助けることだけを考えてほしい。)

私たち自身楽々と子育てをしてきているわけでもありません。嫌な思いもいっぱいしてきているけど、やっぱり息子はかけがえのない家族であることに違いはないと思っています。

1年後のアンケート

- 昨年6月に全国の育成会の会員に事件に関するアンケートを取った結果。
(550中304の回答)
- 周囲の環境が悪くなった…68%
- 障害者に関する報道が増え共生社会について考える機会が増えた…52%
- 被害者匿名について…実名40%、匿名7.5%、分からない27%

福祉フォーラム2018-2019-03.25 12

事件の前後の環境が悪くなったというのと考える機会が増えたというのとどちらも多くなっています。

また、育成会のなかでも名前を出すべきだということと匿名でもいいんじゃないのということとぱっと分かりますね。どっちかなあという方もたくさんおられるのが現状です。

今まで障害者はいないほうがいい

んだと感じている人が、みんなのなかでもちょっとあって、今回の事件によって、障害者に対して思っていることを、「あっ、言ってもいいのか」と勘違いして、言葉に出して言われることが増えているらしいんです。障害者に対してあまりいい印象をもっていないことを自分も思っていたけれど、言っちゃいけないと思って抑えていたのが、ああ、言ってもいいのかなと思って言ってしまう。というのが増えて環境が悪くなったというのが68%です。

そして、二つめは社協さんとか学校とかのいろんな所は、この事件をきっかけに共生社会に向けて、自分たちは障害者のことを学ばなくっちゃとっていただいている方もたくさんおられる。ですから、研修会を開いたり、こちらへ話しに来てくださってという機会も前よりうんと増えています。これが52%に表れている。

建て替え問題ですが、今の流れとしては、地域で当たり前の暮らしをしていこうという方向に育成会のなかでは、そういう考え方が多いということが%に出ている。

要は、皆さんがちゃんと障害ということについて教育をしてほしいということ、そして、あの事件をきっかけに見えてきた課題をみんなで考えましょうという機会をもつべきだとか、ふれあいということをもっと大事にすべき、知らないから差別が起こるわけ

- 立て替え問題…元の場所大規模12%
別の場所大規模…11.8%
地域の小規模施設に分散…40%
- 2度と起こらないように、望む施策
職員教育の充実…66.7%
施設の安全確保…49.3%
差別解消のため課題を伝え社会啓発…71%
地域との交流事業…65%
施設ではなく地域で暮らすための福祉サービスの充実…23.6%

福祉フォーラム2018-2019-03.25 13

ですから、虐待も差別も根っこは同じですから、もっとふれあって知ってもらおうということが大事だともっておられるのが数字に出ています。

- 人間は生まれながら心身両面にわたってきわめて大きな可能性を潜在的にもっていて、この可能性を自ら伸ばそうとするのは人間本来の性質です。
- 差別や偏見は、こうした可能性に対して、特定の個人や集団に正当な理由もなく生活全般にかかわる不利益を強制する行為です。



福祉フォーラム2018-2019-03.25 14

こういうことが差別や偏見ということになりますので、ここを私たちはちゃんと周りの方にちゃんと伝えていって、差別や偏見をなくしていく。今言われている合理的配慮を求めていくことをしなければならない

と思っています。

障害のある子も一般の皆さんと同じように、当たり前で暮らしたい。当たり前の生活をさせたいと言ってきたから、匿名のような特別の配慮は求めることはできないと私は思います。当たり前で暮らしたい、当たり前の生活をさせたいと言ってきたわけですから、自分だけ、「匿名です」という特別の配慮を求めることはできないと私は思います。

障害者の置かれている現状

- ・障害者施設における事件以降、様々な意見が飛び交い、障がいのある人に対する批判や差別的な言葉が以前よりも増えたように感じ、大きな課題となっています。
- ・障がいのある人や家族は、そうした視線や意識及び環境の中で過ごしています。
- ・しかし、私たち家族は大切な我が子を守り、差別の無い、安心して暮らせる社会を目指して、障がい者に対する理解を広めていきたいと思っています。

福祉フォーラム2018-2018-03.25

15

私たちの思い

- ・障害があっても当たり前の生活を求めてきた。障害を理由に、匿名の様に特別な配慮を求めることは出来ない。(我が子の存在が無くなる)今後、親も乗り越えなければならない課題である。
- ・事件があったからこそ、もっと私たちは前に出て伝えることをやっていかなければならない。心ない言葉があって、それに一つひとつ反論するというよりも、9月号のようなメッセージの出し方で多くの皆さんに気付いていただきたい。

「彼らは一生懸命前向きに生きている！」と

福祉フォーラム2018-2018-03.25

16

お名前を出すとやっぱりマスコミが一押し寄せて、つらい部分もありますけど、一般の方はそれを受けておられるのですね。私たち障害者の家族や障害者自身も一般の人と同じように当たり前で生活したい、同じような生活をしたいたいということであれば、そのつらい部分はやっぱり受け取っていかねばしょうがないと思っています。

す。障害者だから、ここは特別ということにはちょっと言えないと思います。

それは議論が必要でもありますし、また、この事件の家族から名前を出さないでほしいという強い意思表示があったからというふうに言われています。名前を出さないのは我が子がこの世に存在しないことにつながるんですよ、ということをお聞きしたい。このことを親自身が乗り越えていかなければならないことだと思います。事件があったからこそ私たちはもっと前に出て、伝えることをやっていかなければならないと思っています。

9月号のあの写真のように、彼らは一所懸命前向きに生きてるんだということを伝えていく必要があると思います。あの写真の一部とかもう少し新しい写真で、「手をつなぐ」の表紙の裏に家族の写真が最近載ってますね。あの写真をパネルにしたものがあるんです。それで、いろんな所で、写真展ができるようにしていますので、何かフォーラムとかいろんなことをされるときに、入り口の所で写真展をしようということがあれば、言っていただいたらお貸ししますので、是非そういうこともやって共生社会に向けての活動も別のやり方でやっていただければありがたいです。

障害者の存在の価値・命の価値

- ・障害者も人間であり、人間と人間の関係が人間を形成していくのです。
- ・人間とは人之間と書きます、単なる個体ではありません。それは社会的存在であることを意味しています。人間関係こそが人間の存在の理由なのです。
- ・自ら主体的な意味を持ち、懸命に前向きに生きています。
- ・日々の仕草の奥に、独特で個性的で豊かな人間性を持っています。

福祉フォーラム2018-2018-03.25

17

性的で豊かな人間性をもっているのが、障害のある人たちの在りようだと思います。

この言葉は、ずっと以前に「手をつなぐ」に書かせてもらったのですが、障害のある子は家族のなかでそういう存在なんですということを社会の皆さんに知ってもらいたいです。

「周囲の者が、親もそうですが支援者も含めて心豊かであることが重要である」というのは、支援をする者が、何かあって精神的に不安定であったり、家庭内の問題とかいろいろあると、いい支援ができないと思います。そういう意味では周りの支援する者が、心に少し余裕がないといい支援につながっていかないということがあるという意味です。

「発達の道筋」について、障害児が生まれて発達していく道筋と障害のない子供が生まれて発達して

いく道筋は、人間の発達の道筋として同じです。ただ障害があるから、歩みは遅いというのはあります。けれども、通っていく道筋は同じです、そして亡くなっていくときも同じです。みんな一人でなくなっていくわけですし、誰かのお世話になって亡くなっていくわけです。年を重ねて体が動かなくなるといっても障害があってもなくても同じ道筋を通して亡くなっていくわけです。

そういう意味では同じ道筋を通していくわけですから、人間としての根っこは同じです。障害があるから少しゆっくりゆっくりですが、年を重ねて人生の節目を通過していくことは同じだと思います。根っこは同じなんだから障害のある人ない人の区別を必要もないなあとと思っています。それを保障できる環境を作っていかなければならないと思います。

- 誰かの許可を買ったり、温情や善意にすがって生きているわけではありません。
- 生きることへの強い意志を持って、一人の人間として、当然のように生きている存在です。
- 私たち家族にとって、かけがえのない大切な存在です。
- 家族の中心的な存在として、共に悩み、共に泣き、共に笑い、共に幸せを感じることのできる存在でもあります。

福祉フォーラム2018-2018-03.25

18

- 人は障がいの有無に関わらず、人間と人間との関係の中で向上していくものだといわれています。
- そのためには、私たち周囲の者が心豊かであることが重要となります。
- 本人たち自身は、当然に健全な発達をするべき権利を持っています。そして、**その道筋は障がいがあってもなくても同じ発達の道筋を辿って成長していきます。**それを十分保障できる環境や境遇を、私たち周囲の者が作り提供しなければなりません。
- **一人ひとりにあった柔軟な視点や価値観で見る**ことが、本人が生き生きと幸せに育ち学ぶことにつながります。

福祉フォーラム2018-2018-03.25

19

「障害のある人と私たちは根が一つ」

- 心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人びとと私たちが、実は根が一つなんだ、本当に**発達観から見て根っこが一つだという共感の世界**を——理屈の上でもせめて共感のというものの根拠があることを、私たちは知りたいと思います。
- ただ、本当に共感できるかどうかは年季がかかります。(中略)何年かかってもいいから、あわてず急がず、本当にわが心の中に愛を育てていきたいと思っています。愛というものは育つのです。愛がもともとあるから育つのです。

(糸賀一雄 最後の講義より)

福祉フォーラム2018-2018-03.25

20

これは糸賀先生の言葉です。糸賀先生はクリスチャンでもありませんし、仏教にも深いですが、愛という言葉がたくさん出てきます。私たちは言葉もまだ何もない、泣いておっぱいを飲んでるとき、親は我が子を育てる時、無償の愛で育てますでしょ。何かを子供から返してもらおうと思って育てているわけじゃないですよ。無償の愛で育てる。

その愛を受けて私たちは育ってきたのです。だからこそ、我が子を育てるときに無償の愛で育てることができるのです。その愛をもっともっと育てましょう、というのが糸賀先生の教えだと思います。私たちは愛を親からもらい、子に分け与えているという、自分たちのなかには愛はもともとあるんだとおっしゃっているんだと思

います。

- その社会に住む一人ひとりが、その生を喜び、生まれて来たことの生き甲斐を感じるようであれば本当の成熟した社会ということは出来ないと思います。
- その成熟した社会は、精神的な福祉面の増大に支えられていなければ、その名に値するものではありません。
- 人が人を理解し多様性を認めるといふことの深い意味を探究する必要があります。
- 私たちは自らの差別観とも戦い「自分自身との対立にまで立ち向かわせる」必要があります。

福祉フォーラム2018/2018-03/25

23

ここからは、市民と一緒に共生社会を作っていく必要があるということを書かせてもらっています。

地域で当たり前に生きたいということに対する人権侵害に対して権利擁護の機能を確立して取り組んでいく必要があるといふことは、権利擁護支援はすべての住民の課題だからなのです。

障害のある人だけが権利擁護をいうのではなくて、障害のある人もお年寄りも子供もみんな一人の人間として、権利をもっているわけです。その権利を擁護していくことは障害者だけではなくて、みんなの課題と捉えて活動することが本当に必要なんだと思います。そのような権利擁護支援の取組を住民と一緒にになって取り組んでいくことが重要だと思います。

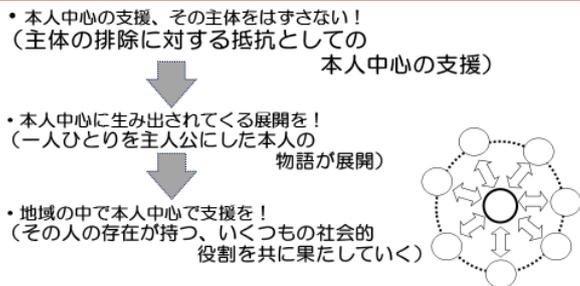
市民と共に目指す共生社会

- 一人ひとりの存在の価値に立脚した、地域で当たり前に生きたいということへの、人権侵害に対する権利擁護支援機能の確立を目指して取り組みましょう。
- 権利擁護支援はすべての住民の課題でもあるということが要となります。
- そのような権利擁護支援の取り組みを進めるためには住民活動と家族や専門職による協働を目指すことが必要です。

福祉フォーラム2018/2018-03/25

24

本人中心支援の展開

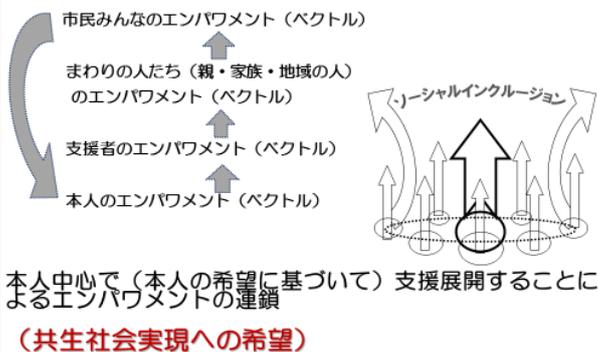


福祉フォーラム2018/2018-03/25

25

本人中心に、黒い丸が本人ですが、周りにいろんな立ち位置の人がいて、お互いに本人にいろんな支援をしたり連携をとったりしながら進めていくことが必要だと思っています。

それが、本人がこうしよう、支援者と共にああしよう、周りの人たちも一緒に安心して暮らせる生活を目指そうということがぐるぐる回って、さらに地域社会へ、そして共生社会の実現につながればいいと思っています。

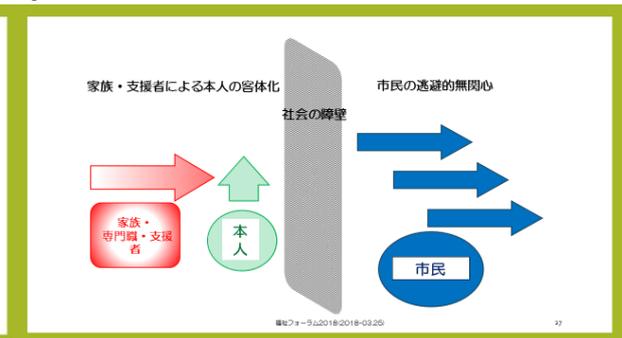
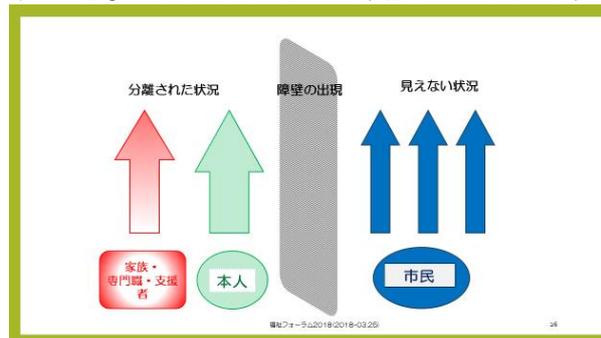
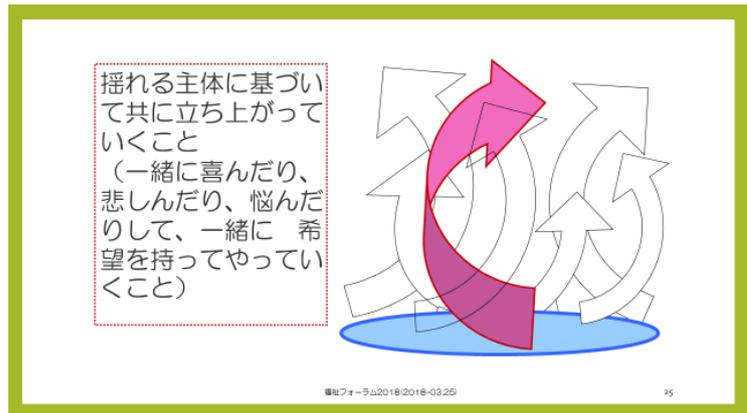


福祉フォーラム2018/2018-03/25

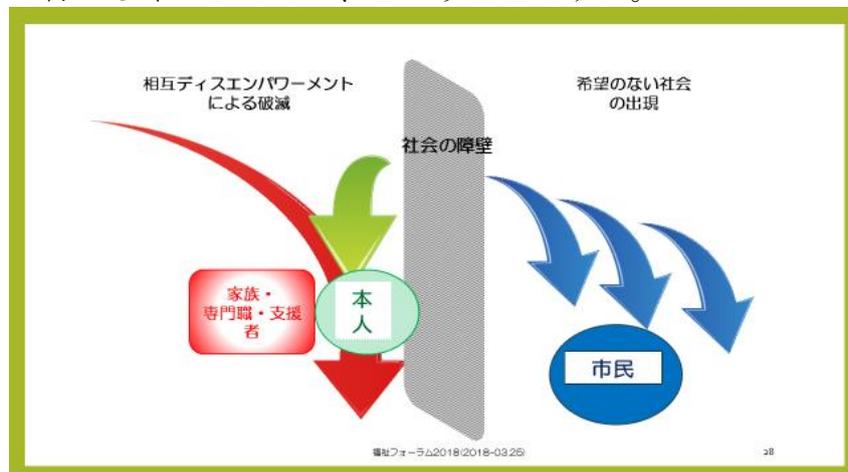
26

主体になっている本人さんはとても揺れます。その日によって状況は違いますが、とても揺れます。揺れるけれどもその揺れに寄り添いながら、共に揺れて揺れながら、一緒に悩んだり悲しんだり希望をもったりしながら寄り添いながら支援していただきたい、と思います。

この頃は、これから先は介護する人たちの人数がどんどん減ってくるというので国では、介護ロボットの開発を進めています。介護ロボットは知的障害者の場合はどうなのか疑問をもっています。こういうように本人も揺れますから、それに寄り添って一緒になってもらわないとだめなんです、と言いました。すると、人間の支援者は揺れるから、揺れないロボットは一定だから、その方がいいんじゃないか、と言われたりしました。でも私は、本人は揺れるから、それに寄り添ってほしいんです、という意見を言ったことがあります。どういうふうにしていったらいいんでしょうね。本人の揺れに寄り添ってくれる機械があればいいんですけど。なかなかそれは難しいでしょうね。

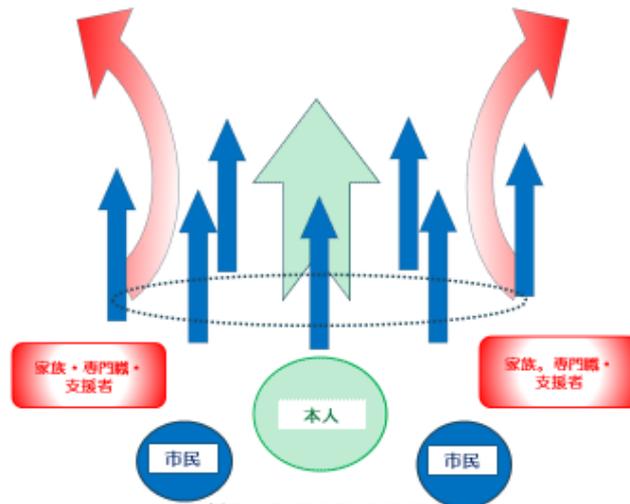


社会に壁があると、お互いに、左上の絵のようにみんなが見えない状態で向上しようとしているわけですね。その次の右上の絵は、その家族や支援する人が、本人を客体化して見ると、客体というのは、本人を支援がいるだけ存在というふうに見ることですが、そうすると、市民は、私たち関係ないからねというので、どこかへ行っちゃいませんか、ということですね。



そういう社会状態が、ずっと蔓延していくと、住民そのものも地域自体が安心できる地域にならないので、だから、みんなが落ち込んでいく。そんな社会になっていくんじゃないですか、ということです。

本人、市民、支援者相互エンパワーメントによる共生社会の実現



福祉フォーラム2018/2018-03-25

29

社会の壁を取り除いて、みんな一緒に向上していく社会になる。これが共生社会につながっていくんでしょね。

本人、家族・教員・支援者、市民の三者が一緒に力を合わせて向上していこうというエンパワーメントですね。これからはこういう活動が必要ではないかと思えます。

地域でこのような活動を、というと、久保さん、それは難しいねとよく言われるんですね。難しいけれども、私は大きなことを考える必要はないと思っています。自分のゴミ出しをする範囲から始めてもらっていいのです。

そこから、うちにも障害者がいることと、それから、みんながみんなゴミ出しをする範囲のみんなが安心して暮らせるには、うちも何か役割を担いますよ。うちの町内会の皆さんに助けてもらうこともあります、というお互い様の関係で、一人一人が自分の身近なところから始めることが必要だと思います。

【本人、家族・教員・支援者、市民と三者の相互エンパワーメント】

専門職が要支援者を対象化、客体化することではなく、

本人（当事者）、家族・教員・支援者（専門職）に市民（地域住民）も加わった、三者関係のもとでの主体化（エンパワーメント）によって地域共生社会形成の原動力を生み出すことが必要です

福祉フォーラム2018/2018-03-25

30

- 本人を主体とした教育は、障害の有無にかかわらず一人もらすことなく、その子の人権が守られた成長を保障していこうとする意思共有が大切です。

- 障害が重くても、意思があり感情があること、みんな同じ大切な命と人権を有していて、どの子も大切な存在として、学び暮らせることが重要であるとの教育を形成していくことこそが今必要とされています。

福祉フォーラム2018/2018-03-25

31

来年から子供のうちから、今までよりもうんと力を入れて共生社会や心のバリアフリーということを、教育の中で進めてもらえるようになりました。

だから私たち自身も、地域のなかでも、そういうことを展開していく必要があるわけです。

最後になりましたが、「この子らを世の光に」という糸賀先生の言葉をお伝えします。

2

『この子らを世の光に』

『この子らは、どんなに重い障害を持っていても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれてその人なり人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちの願いは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ認め合える社会をつくろうということである。『この子らに光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。』 (糸賀一雄 書より)

福祉フォーラム2018(2018-03.25)

32

3

「この子らを世の光に」 の意味すること

糸賀一雄氏は、重度の障害者が前向きに一生懸命に生きている姿から、自己実現を目指すことこそ重度障害者の「生産的活動」であると位置付け、社会が重度障害者の「生産的活動」に気づくことで、社会の価値観を変革していくと期待していました。障害者の親たちが我子と共に育ち、社会に対する行動を強めることは、社会の変革に大きな役割を果たすと考え「この子らを世に光に」と提唱しました。

福祉フォーラム2018(2018-03.25)

33

このように糸賀先生はおっしゃいました。私自身も日本の支援を必要とする障害福祉支援というのは重度の障害者から始まっていると思います。戦後間もない本当に偏見と差別の激しかった時代から障害のある人たちの命の大切さに気づいた人は、本人に寄り添いながら、そして、この人たちが自身はどうしたら安心して、ゆくりと暮らすことができるんだろうかと思って試行錯誤を重ねてきたわけです。

そして、本人がにこっと笑っておられるとか、そういうのでサインを返してくる。ああ、この人にはこうしたら分かるんだ、こっちの言っていることが伝わるんだ、この人はこういう支援をすると安心してもらえるんだということを学んで、積み重ねて、今の支援の基礎になっていると私は思っています。日本の障害福祉は重度の障害の人が本当の意味で作ってきたのだと思っています。

糸賀先生の思想を今受け止めて

• 現在の状況に照らして受け止めること

→あらゆる個人の尊厳を等しく尊重するという、障害の有無、年齢、性別、国籍等を問わない普遍的思想が大切です。

• 障害者福祉の分野だけに留めることなく

→普遍的思想として、それぞれの立場で受け止めて行動することが求められています。

→それは、**地域共生社会への道**につながります。

福祉フォーラム2018(2018-03.25)

34

現在の状況に照らして、私たち自身が糸賀先生の思想を受け止めることが必要だろうと思います。また、障害者福祉の分野だけに留めない。

糸賀先生は障害というだけでなく、性別も年齢も、もっと言えば、国籍も関係なくというような感じですね。普遍的な思想として受け止めて、行動していくことが、共生社会への道につながっていくのではないかと考えています。糸賀先生の思想をきちっと受け止めることが必要だろうと考えています。

共生社会の実現に向けて

- 津久井やまゆり園事件は、私たちにとって大きなショックと悲しみを与え、障害者の置かれている現状を突き付けるマイナスの事件です。
- 一方で地域社会では、障害者の人権や共生社会について話し合われるプラスへのきっかけにもなりました。
- 津久井やまゆり園事件を風化させることなく「**マイナスをプラスに**」変えていきましょう。

福祉フォーラム2018(2018-03.25)

35

どうもありがとうございました。

<参考> このスライドの文言が、小さくて読めなかったので、再度掲載して、分かるようにしました。

だいじょうぶ、手をつなごう

7月26日、神奈川県にある津久井やまゆり園で、障害がある人が殺傷される事件が起きました。容疑者として逮捕された元職員の男性は

「障害者には生きる価値がない」と、障害がある人の命と尊厳を否定する言動を繰り返していました。残念ながら、障害のある人を一括りにして「不幸だ」と決めつける認識は社会のなかに根強く存在します。さらに今回は被害者の名が伏せられたことで、残念にも命を奪われた一人ひとりの姿が見えないままでした。

今回の「手をつなぐ」では、当会の声明文や呼びかけに賛同いただいた皆様から寄せられた、思い出のつまった写真を掲載しました。その一枚一枚からは、障害はありながらも幸せに、懸命に生きる力が感じ取れるはずです。

障害があるという理由でこうした一人ひとりの存在に目を向けず、その命や尊厳を否定する考えに、私たちは手を取り合って立ち向かわなければなりません。

私たちの家族は「障害者」という記号ではなく、一人ひとりの大切な人間である。このことを社会に伝えられるのも、また私たちであるはずです。



津久井やまゆり園での事件について（障害のあるみなさんへ）

7月26日に、神奈川県にある「津久井やまゆり園」という施設で、障害のある人たち19人が殺される事件が起きました。容疑者として逮捕されたのは、施設で働いていた男性でした。

亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、そのご家族にはお悔やみ申し上げます。また、けがをされた方々が一日でも早く回復されることを願っています。

容疑者は、自分で助けを呼べない人たちを次々におそい、傷つけ、命をうばいました。

とても残酷で、決して許せません。亡くなった人たちのことを思うと、とても悲しく、悔しい思いです。

容疑者は「障害者はいなくなればいい」と話していたそうです。

みなさんの中には、そのことで不安を感じる人もたくさんいると思います。そんなときは、身近な人に不安な気持ちを話しましょう。みなさんの家族や友達、仕事の仲間、支援者は、きっと話を聞いてくれます。

そして、いつもと同じように 毎日を過ごしましょう。不安だからといって、生活のしかたを 変える必要は ありません。

障害のある人もない人も、私たちは一人ひとりが大切な存在です。障害があるからといって 誰かに傷つけられたりすることは、あつてはなりません。もし誰かが「障害者はいなくなればいい」なんて言っても、

私たち家族は 全力でみなさんのことを 守ります。ですから、安心して、堂々と生きてください。

平成 28 年 7 月 27 日

全国手をつなぐ育成会連合会

会長 久保厚子

パネルディスカッション 前半 各氏からの提言

※ <罫線で囲ってある部分は、プロジェクターで表示したものです>
コーディネーター：村上 満 氏

福祉フォーラム

障害者施設における事件以降、様々な意見が飛び交い、障害のある人に対する批判や差別的な言葉が以前より増えたよう感じ、大きな課題となっている。

「津久井やまゆり園事件を風化させない！」

風化とは、個であれ集団であれ、人が抱く意識や関心の度合いが。経年などによって目に見えて低下すること

シンポジウムの趣旨は、障害者への差別や偏見、また、被害者の匿名報道等を振り返り、地域社会に向けて、今後、どのように「障害」への理解を、伝えていけばいいのか考えましょう。

資料 ～1年後の2017年6月に全国の育成会の会員に事件に関するアンケート結果（550人中304人回答）～

周囲の環境が悪くなった	68%
障がい者に関する報道が増え、共生社会について考える機会が増えた	52%
被害者匿名について	実名 40%
	匿名 75%
	分からない 27%

久保氏の基調講演を受けて

1. SNS上でのあまりにも“言いたい放題”発信をどうする？
⇒ 強い偏見、差別、幽霊しそう、存在否定
2. ヘイトスピーチ、ヘイトクライムにどう対応するか？
⇒ 間違った言論の自由、やさしさのはき違い
3. 国民の意識をどう変える？
⇒ 障害者排除の意識、虐待、住民コンフリクト
4. もっと私たちは前に出て伝えること！
⇒ 「メッセージの出し方」の工夫
5. 障がい者の存在の価値・命の価値
6. 一人ひとりにあった柔軟な視点や価値観で見る
7. 糸賀一雄先生 最後の講義から
⇒ 「障害のある人と私たちは根が一つ」
8. 本当の成熟した社会とは？
9. 人が人を理解し、多様性を認めることの深い意味
10. 自らの差別感との戦い
⇒ 「自分自身との対立にまで立ち向かわせる」

- 1 1. 市民と共に目指す共生社会
⇒ 住民活動と家族や専門職との協働を目指し、権利擁護支援の取り組みを進めること
- 1 2. 本人中心で(本人の希望に基づいて) 支援展開することによるエンパワメントの連鎖 (3者相互エンパワメント)
⇒ その人の存在が持つ、いくつもの社会的役割を共に果たしていく、共に立ち上がっていく
- 1 3. 社会の障壁を壊していくためには、①本人、②家族・教員・支援者、③市民 の3者が主体化していく
- 1 4. 本人を主体とした教育
⇒ みんな同じ大切な命と人権を有していて、どの子どもも大切な存在として、学び暮らせることが重要であるとの教育を形成していくこと
- 1 5. 「この子らに光を」あててやろうというあわれみの政策
⇒ 「この子らを世の光に」
- 1 6. 現在の状況に照らして受け止めること
- 1 7. 障害者福祉の分野だけに留めることなく
⇒ 糸賀先生の思想は普遍的な思想 1 8.
⇒ 地域共生社会への道
- 1 8. 今回の事件の「マイナスをプラスに」
⇒ 障害者の人権や共生社会について話し合われるプラスへのきっかけ

これらの久保会長の講演を受けてそれぞれの立場からご提言いただく。最後は風化させないキーワードをいただきたいと思います。

関哉直人 氏

キャラバン隊の活動を見直し、広げていこうと思ったのはグループホームの反対運動があったからです。障害者のグループホームが4件、保育園のが5件あった。

地域の反対運動に顕在化する偏見、無理解

- ・「平穏な生活が害される」
- ・「地価が下がる」
- ・「事件が起こるかもしれない」

⇒ なぜ、うちの地域で。

他の地域でつくってくればいいのに。

総論は賛成であるが、「他地域へ作ってくれ」と言われる。事前調査をしているのだが、「こんな閑静な住宅街にグループホームを作る必要があるのですか。その方たちも落ち着かないでしょ」と言って反対される。根拠がない。

地域の反対運動に顕在化する偏見、無理解

- * 東京都S区の事例
- * 東京都B区の事例

S区の実例。隣にアパートがあるのだが、「グループホームが建つことによって、住人が出て行ったら、賃料は補償してくれるのか。」といわれたが、そんなことはできない。なので、誠心誠意

・障害をもつ人が地域で暮らす時代はどのようにして出てきたか。

・障害をもつ人が地域で暮らすことで、皆さんも幸せな社会につながる
と、きれい事かもしれないが、正論を言い、

- ・トラブルは今までありませんよ。
- ・できるだけ地域へ協力させてもらいます。

と、話をした。しかし、最後に、「あなたたちの常識は、社会の非常識ですよ」と言われた。心に残る言葉だったが、この言葉があったから最終的には合意ができた。

B区の事例。のろしがその土地の周りに立って、黄色い旗が立って強く反対を言われた。そこで、地域フォーラムを何回かやって、「本当に地価が下がるのか」というみんなが心配する点について、他地域の建つ前と建った後の何年かの推移を統計にして示して、下がっていないことを理解してもらおう。また、「事件が起こるのか」ということについてデータを基に発表する。

しかし、シンポジウムやフォーラムに地域の反対する人が来るかという来ない。でも、それをやっていく中でグループホームを建てていく。

人の心に踏み込んで、それを変えさせることは難しい。心を変えるのではなくて、ちょっとした理解が必要なのだと思って提示してきた。多くの差別は無理解に基づいている。我々も知らない分野の話になれば、その無理解が言動の差別つながることかもしれない。

ちょっとした理解ならできるし、それで差別がなくなっていくとか、対応が変わるということであれば、大いにありうることだと思う。やっぱりキャラバン隊が大事だということになる。もう一つは、小さい頃に経験があったり、記憶の片隅にあったら成長したときに対応が違ってくるだろうということ子供に焦点を当てる。キャラバン隊の重要性を再認識する。昨年、一昨年と活動をしてきている。となみ野にもでき、全国でもう40以上になって、それぞれの地域の活動をされてきている。

この活動は人の心を変えさせるのではなくて、多くの偏見の背景にある無理解に向き合うことで、少しでも知ってもらおうことが重要だと思っています。。

キャラバン隊の活動の重要性

昨年の段階で全国に38のキャラバン隊
多くの偏見の背景にある「無理解」に向き合う
子どもに伝えることの大切さ

- ・私は障害者のことをばかにしていました。「障害者も私たちと同じように生きている。ただ苦手なことがあるだけだ」と心を改めることができました。
- ・「あの人は知的障害だな」と決めてはいけなことがわかりました。知的障害の人と同じ人間なのわかりました。
- ・わたしは、障害のある人を何度も見たことがあって、何にも思いませんでした。けれど障害のある人の力になりたい！という気持ちは今はすごく強いです。
- ・これからは「ゆっくりでいいよ」や「みんなとちがうのにすごいね」など、ほめるような言葉をかけるようにしたいです。
- ・私の妹も知的障害者です。知的障害の人は、理解のある人がいるだけでいいとわかりました。だから、妹のことも気にかけていきたいなと思いました。
- ・障害者の人には、その人がうれしい気持ちになれるような言葉をかけられたらいいなあとと思いました。

素直な感想である。子供たちにこういった活動を投げかけてみるのは、やっている方も意義を感じるし、子供たちも非常に素直に受け止めてくれる。

啓発というのは、国や社会がどう考えているのかというところですが、検証チームの報告書にもあります。

相模原事件検証チームの提言から、鍵となる差別解消法・差別解消条例
〈相模原市の障害者支援施設における事件の検証及び再発防止策検討チーム
「報告書～再発防止策の提言～」〉

- 障害のある人もない人も、お互いの人権を尊重して支えあうことの重要性を、成長過程を通じて自然に身に着けていくことができるよう、学校教育をはじめとするあらゆる場における「心のバリアフリー」の取組を充実させるべきである。

〈障害者差別解消法〉

- 第15条 国及び地方公共団体は、障害を理由とする差別の解消について国民の関心と理解を深めるとともに、特に、障害を理由とする差別の解消を妨げている諸要因の解消を図るため、必要な啓発活動を行うものとする。

障害者差別解消法では、障害理解のための啓発活動を行いなさいと書かれている。これらを受けて、各地でも条例ができています。

〈各地の条例〉

- 東京都（策定中。パブコメ資料より）

（都の責務）

障害、障害者及び障害の社会モデルについて、都民及び事業者の関心と理解を深め、適切に行動するために必要な啓発を行う。

（教育の推進）

都は、障害、障害者及び障害の社会モデルに関する正しい知識を持つための教育が行われるよう努めるものとする。

- 障害のある人もない人も共に安心して暮らせる八王子づくり条例
第8条 市は、市民及び事業者が障害及び障害者に対する理解を深めるよう、普及啓発その他必要な措置を講ずるものとする。
2 市長及び教育委員会は、児童及び生徒が障害及び障害者に対する理解を深めるための教育の重要性を認識し、その実施について相互に連携を図るものとする。

- 障害のある人の人権を尊重し県民皆が共にいきいきと輝く富山県づくり条例

第22条 県は、障害及び障害のある人に対する理解を深め、障害を理由とする差別を解消することの重要性に関する県民の理解と関心の増進を図られるよう、障害及び障害のある人に関する知識の普及啓発のための広報活動、障害のある人と障害のない人との交流の機会の提供その他必要な施策を講ずるものとする。

第23条 県は、学校において、児童及び生徒が障害及び障害のある人に関する正しい知識を持つための教育が行われるよう努めるものとする。

東京都では理解・啓発をやっていこうとか教育の課程に障害理解の教育を行うように努めていきたいと思いますと書いてある。八王子市は、教育委員会が理解啓発の教育の重要性を認識して、その実施について市と連携を図るものとする」と具体的に書いてある。

富山では、理解啓発や教育についての理解啓発について書かれている。これらを

参考にして、キャラバン隊などの理解啓発の活動をしていただければと思います。

話は変わって、優生保護法は1996年（平成8年）までであった。旧優生保護法は現在「母体保護法」に変わった。旧は優生思想に基づいてできた法律である。最近では、不妊手術の問題が報道されている。どのくらいの数の手術が行われたか、現在各地で探している。

優生保護法について

2018年1月30日、旧優生保護法下で、不妊手術を強制された宮城県の60代女性が、個人の尊厳や自己決定権を保障する憲法に違反するとして、国に1100万円の支払いを求める訴訟を仙台地裁に起こした。

優性保護法は、

優生保護法について

【どのような法律だったのか～旧優生保護法（昭和23年～平成8年）】

第4条 医師は、診断の結果、別表に掲げる疾患に罹っていることを確認した場合において、その者に対し、その疾患の遺伝を防止するため優生手術を行うことが公益上必要であると認めるときは、都道府県優生保護審査会に優生手術を行うことの適否に関する審査を申請しなければならない。

第12条 医師は、別表第一号又は第二号に掲げる遺伝性のもの以外の精神病又は精神薄弱に罹っている者について、精神衛生法(昭和二十五年法律第百二十三号)第二十条(後見人、配偶者、親権を行う者又は扶養義務者が保護義務者となる場合)又は同法第二十一条(市町村長が保護義務者となる場合)に規定する保護義務者の同意があつた場合には、都道府県優生保護審査会に優生手術を行うことの適否に関する審査を申請することができる。

4条では 医師の判断で強制的に、12条では別表により保護者等の同意を得て、審査会を経て行うことできた。

優生保護法（昭和23年～平成8年）

別表

- 一 遺伝性精神病、精神分裂病、そううつ病、てんかん
- 二 遺伝性精神薄弱 ※
- 三 顕著な遺伝性精神病質、顕著な性欲異常、顕著な犯罪傾向、（以下略）

※知的障害ですね

実際には知的障害のある方が、この法の下で不妊手術を受けた。数が多いと言われている。

【改正の経緯、改正までの手術数】

<昭和23年 優生保護法制定>

・優生思想の下、不良な子孫を出生することを防止するとともに、母性の生命 健康を保護することを目的として、優生手術（不妊手術）や人工妊娠中絶等 について規定。

<平成8年 優生保護法を母体保護法に改正>

・障害者を差別する優生思想を排除するため、遺伝性精神疾患等を理由とした 優生手術や人工妊娠中絶に関する規定を削除

・この間、本人の同意によらない不妊手術は約1万6500件（4条に基づく手術が 14,566人、12条に基づき手術が1,909人）行われた。

昭和23年にできて、平成8年に優生思想を排除して、母体保護のための法律になった。

平成8年までの間に、本人の同意によらない手術は約16,500件。富山県では、4条に基づく医師の判断で、103件、保護者同意で行われたものが15件、合計118件と報道されている。実際は分からない。記録がある県とない見があるから。

富山県は記録は廃棄したという北日本新聞の報道があったが、どうか分からない。探したら倉庫にあったということがある。

育成会は優勢保護法・優生思想と戦っていかねばならない、育成会がどう向き合っていくのか、皆さんがそれぞれの立場でどう考えていくのかを考えていかねばならない。当事者は絶対反対で、意見表明をいろいろしている。親の会という立場で、これまでの歴史も踏まえて、どういうスタンスでこの問題と向き合っていくのか。ある面優生思想との関わりやこれまでの歴史との親御さんの向き合い方が問われると思う。

今後遅くない時期に補償の問題が出てくるかもしれないが、そのときに育成会はどのような考えなのか問われてくるかもしれない。育成会というよりも一人ひとりの考え方の問題でもある。

村上 満 氏

去年の2月20日には、ユニバーサルデザイン2020行動計画が出された。これは学校で取り組む心のバリアフリー、企業で取り組む心のバリアフリー、地域で取り組む心のバリアフリー、国民全体で取り組む心のバリアフリー、こういったことをしっかりやっけていこうというアクションプランです。

これを形骸化させないためにも、大事な今日はこの話の中でのいろいろと議論につなげていきたいと思います。

こんな中で、津久井やまゆり園事件、報道機関、あるいは警察からの様々な問題等々で、野沢さんに登壇いただいています。それこそ、報道の面から、メディアの力はとても大きいなあとつくづく痛感させていただいているのですが、その最先端に立たれる野沢さんから思うことをお伝えいただきます。

野沢和弘 氏

相模原事件が問いかけるもの
野沢 和弘 (毎日新聞 論説委員)

私は報道の現場で34年くらい携わってきて、また、重い知的な障害をもつ親でもあります。育成会の委員等も長年勤めてきました。そういう立場です。

事件直後に、入所施設を経営する団体の代表たちから「自分たちこそ被害者だ」みたいなことを国の審議会等で話していた。強い違和感をもった。

二十何人かけがをした中に職員さんは大勢います。でも、亡くなった19人の被害者の中には職員はいない、全員利用者です。もしも同じことが、保育園や幼稚園や小学校だったら絶対に管理責任が問われる。「なんで守ってくれないんだ」と、親たちは猛然と怒る。

じゃ、なぜ知的障害者の入所施設の時だけは施設側が被害者になるのか。本当の被害者って誰なのか、知的な障害をもった本人たちですよ。殺された19人の本人たちです。彼らを守れなかった施設側があたかも被害者のようになってしまっている。違和感を感じます。

施設は被害者なのか？

「自分たちが被害者だ」と主張する施設経営者の団体。

- ・もし幼稚園や小学校で同じ事件が起きたら？
- ・「私たちが守ります」（育成会）はできるか？
- ・5ヶ月前まで働いていた元職員が施設内で起こした事件。施設は被害者なのか？施設の監督責任は問われないのか？

・採用、指導教育、解雇手続きとその後のフォローなど再発防止の方策。

あの後育成会から久保さんの名で感動的な声明文が出た。ニュースキャスターが読み上げながら涙ぐむという印象的なシーンがありました。あれは、素晴らしく、タイミングもよかった。だが、なぜあれを施設の経営者たちが言ってくれないのか。とっていました。入所している子供たちを守れるのは親じゃない。親は守れない、だって、子供を預けているわけだから。本人を守れるのは施設で働いている職員さんしか守れない、事件が起きた時。

これは何でかなあ、とと思っていたところ、施設の経営者で言ってくれる人がいました。大阪の松上さんです。投稿してくれました。「彼」とは植松容疑者のことです。

彼は「未知の異常者」ではない。元職員である以上、施設での勤務中に起きた出来事や人間関係の中に動機につながる何かの要因があったと見るのが常識だ。

障害者虐待防止法では施設内に虐待防止委員会を設置し、虐待があれば市の虐待防止センターへの通報が義務づけられている。障害者への暴言や虐待行為があったとき、施設側はどのような対応をしていたのか。

虐待が日常的に起きている施設は通報しないケースがほとんど。

「北摂杉の子園」の松上利男理事長

普通はこういうふうを考えほしいなと思います。

実際、植松容疑者は事件の起きる前に施設の中で勤務中に数々の暴言や虐待行為をしている。そのとき、あの施設は何をしていたのか。神奈川県では指導したとか、聞き取りをしたとか言っているが、何でそれを改善することができなかったのか、というところまで全く踏み込んでいない。

松上さんの言葉にもあるが、津久井やまゆり園は彼の行った虐待行為は一切通報していない。いったい、じゃ、このやまゆり園の管理責任は誰がとるんだということ。次はメディアの問題です。

匿名とメディア

「容疑者の言い分を垂れ流しているだけ」「被害者に関する報道が少ない」「安易に精神疾患に原因を求めるのはおかしい」と読者からの批判。一方で被害者や施設からはメディアスクラムで被害者の家族が迷惑してる、施設の運営に支障が起きてると批判。

- ・ 県警が匿名発表した経緯の検証
- ・ すべての遺族に弁護士がついた経緯の検証
- ・ 実名報道が必要な論理の再構築
- ・ 「障害者だから家族のプライバシー保護が必要」との県警の理屈の詳細な検討（家族のプライバシーと本人の人権）
- ・ 事件での被害者保護と報道の意義をどう両立させるか。

19人全員匿名で発表しました。なぜかというと、警察が匿名で発表したからです。通常の殺人事件は、必ず警察はほとんどが実名で発表します。親の意向なんて聞きません。遺族の意向なんて一切聞かずに実名で発表します。

しかし、あの事件は匿名で発表しました。その理由は知的障害者の施設の利用者であること。そして、保護者から強い希望があったことです。

一般の事件では一切そんなことも考慮せずに実名で発表する。匿名か実名かいろんな議論があっているが、なぜ知的障害者だとあの事件のように匿名になってしまう

うのか。

報道の現場から見ていると、いろんな意見があっという間と思うけれども、やっぱり社会というのは感情のネットワークで結ばれたもので、生き物であると感じることがある。制度や法律ではなかなか動かないものがある。

たとえば、私が実際に報道した薬害エイズ事件です。

社会は感情のネットワーク

- ・薬害エイズ
- ・血友病という難病患者を襲った悲劇
- ・「差別」を恐れた家族にメディアが抗議
- ・記事が後押ししたH I V訴訟

「薬害エイズ」とは、政府の不作為や製薬企業のエイズウイルスが混入していることが分かっているながら売りまくっていた。そのため血友病患者さんが何百人、千人以上の方が被害を受けたという未曾有のスクandalです。この時に、国はずっと責任を否定していました。政府も否定していました。

裁判になりました、東京と大阪で、7年間。一番最後に国が和解に出て舵を切ったのは、実はこの方が顔をさらし、実名を挙げてテレビカメラの前に立ったことが非常に大きなきっかけになりました。今お子さんが3人になってもおじさんみたいな顔になってますが、現役の大学生でした。

川田龍平さん ヒューマンチェーン（人間の鎖）の写真

これを見て、現役のほかの大学生たちはびっくりしました。血友病・エイズっていうから自分たちに縁のない人たちがひどい目に遭っていたと思っていたのにそうじゃない、自分たちの同級生みたいな彼らが被害に遭っていたんだ。というので、原告団の方にボランティアが殺到して、厚生省の建物を取り囲んで人間の鎖というヒューマンチェーンをやったんです。

私は、厚生省の担当で幹部に取材したら、「何がきっかけかと言えば、やっぱり川田龍平さんが出ての「人間の鎖」だった。窓を開けて下を見たら、自分の娘や息子のよう世代の人たちが『責任を認めろ』拳をあげている。もうこれは彼らを裏切ることはできないと思った。」と幹部が言っていました。

毎日新聞の記事

「12歳 苦しみ抜いて死んだ」「なりたかった『せんせい』の言葉残し」

その後も、こういうちっちゃな子供ですよ。いっちゃんという小学生です。お父さんに何度も取材に行きました。お父さんが言っていました。自分で注射してエイズウイルスに感染しちゃったので、やり場がない。最後は病院に泊まり込んで、自分の見ている目の前で、小さな男の子が血を何度も吐いて、骨と皮だけになってやせ細っていくのに、自分は何にもできなかった。もう気が狂うようになって、医者になんとかしろ、お前医者だろうと掴みかかっていたと話してくれた。

こういうものが、人々の共感とか、そういうものを動かして行って、理不尽な被害に対して、みんなできちんと立ち向かうんじゃないか、とか、二度とこういうことが起きないようにしようじゃないかというものを呼び起こすわけです。

これが今回の事件には決定的にないんです。

障害を持った親子等の笑顔の写真 数枚

久保さんの発表にもありましたが、育成会がその時に、匿名でしか発表できない同じ新聞に、被害者ではないけれど当事者の家族と幸せな当事者の写真を意見広告を出して紙面を埋め尽くそうじゃないかと話し合っって呼びかけたら、全国から殺到したんです。

やまゆり園事件は、19人も殺されたわりには関心呼び起こさなかった。記事も少なくなつて風化していると言われた。

1年後ネットの記事で突出して読まれた記事があるので紹介します。警察がずっと匿名で発表するので、現場の記者も本人たちや家族の声が聞けない。それでも若い記者が粘り強く1年間丹念に調べて、訪問し、水をかけられたり罵倒されたりしたけれど、しっかりと声を伝えたいと家族を説得して何人かにインタビューを受けてもらえたそのうちの一人です。これは、あるお父さんです。実はお母さん（奥さん）ががんになってしまい、やむを得ず自分は早期退職して娘さんをやまゆり園に預けた。母はなくなっています。これがたくさん読まれたのです。

49歳で早期退職してから、長女と一日中、一緒に過ごした。ソファに腰掛けると足や肩をトントンたたき、抱っこをせがんだ。本を読もうとすれば「かまって」とばかりにはたき落とした。夜中になると布団に滑り込んできた。「気まぐれで、わがままで、甘えん坊だった」

あの日の朝、テレビで事件を知った。駆けつけた園で職員から「なくなりました」と知らされた。長女と対面できたのは午後8時頃、「すごくきれいで、今にも起きそうだった」ひつぎには長女が大好きだった「となりのトトロ」の絵本を入れた。

そばにいたくて、四十九日まで骨つぼを枕元においた。毎朝仏壇にコーヒーを供えて、「元気か？」と声をかけ、「元気ってことはねえか」とつぶやくのが日課になった。

洗面所で歯磨きをすると、後ろから抱きついてきた長女を思い出す。トイレにもリビングにも。少しずつ現実を受け止めようと生きてきたが、ふとした瞬間に「もういないんだ」という現実が去来し、おえつしてしまう。

最後に会ったのは、事件の3週間前。肩の具合が悪く、いつもする抱っこができなかった。「次はしてあげるね」。すねた長女に言って別れた。「最後に抱っこしてあげられなかった。早く会って抱っこしてあげたいなあ」

このお父さんもがんになったが、延命治療をしないで、早く娘に会いたい言っておられます。

匿名では、こういう家族の思いを世の中に伝えられない。こんなささやかな幸せを踏みにじって、切り裂いたのがあの事件です。もっとこういうことを世の中に伝えなくてはいけないと思う。

報道、マスコミにはいろいろ課題があると思います。いけない報道もいっぱいあった。一番いけないのは、こういう声を社会に伝えられていないことです。警察が匿名で発表したって、やっぱり報道の責任として伝えねばならない。

「障害者は不幸を作る」？

優生思想や障害者を無価値に思う社会の空気はどこからきているのか。障害者の存在を恥ずかしい、隠したいという家族の思いが今回の「匿名問題」の根っこにあり、欧米では否定されている入所施設が日本では根強く支持されている原因となっているのでは？

- ・障害者自身の人権をめぐる諸論は、家族に負担や義務がのしかかる日本の現状を変えることとセットで考えないと整理できない。
- ・親の扶養義務、保護義務
- ・成年後見と意思決定支援
- ・国連障害者権利条約、障害者差別解消法

・施設建設への住民の反対

「障害者は不幸を作る」は、植松容疑者だけが言っているわけではない。第二次大戦のヒトラーだけでもない。あの時代、西洋の一流大学の一流の学者が、いかに白人が優秀であるかを科学的に証明しようという研究に血道をあげていた。

さすがに今はそんなことを言う人はいないが、しかし、生殖医療、出生前診断、遺伝子診断など、こういうものが、優秀な人間を生み出そうという欲望をかきたてられている時代です。

「サピエンス全史より」

西洋の超一流大学の学者たちは当時の正当的な科学的方法を用い、白人の方がアフリカ人やインド人よりも知能が高く、倫理的で、技能が優ることを証明すると称する研究を発表した。

ナチスは人間性を忌み嫌ってはいなかった。人間性を賛美し、人間という種の絶大な可能性を信じていた。

だが、彼らは進化の論理に従い、不適当な個体を排除して、もっとも適当な者だけが生き延びて子孫を残すようにすることを自然選択は許されなくてはならないと主張した。

ヒトラーに対する戦争の終了から60年間は、人間至上主義を進化論と結びつけ、生物学的方法を使ってホモ・サピエンスを「アップグレード」することを提唱するのはタブーだった。

だが、今日、そのような事案が再び流行している。下級人種や劣等民族を皆殺しにするなどと言う人はいないが、人間の生物学的作用に関して深まる一方の知識を使って超人を生み出そうと考えている人は多い。

- ・生殖医療 代理母出産、卵子・精子バンク
- ・出生前診断 生涯の忌避、命の選別
- ・遺伝子診断 疾病・障害の排除、超人への渴望

※格差社会をもたらす思想的背景

知的能力・健康、身体的優位性を過度に求める価値観

→「能力」の単純化、多様性の否定

→弱気を排除する風潮 →人間社会への危機

排除されるのは障害者だけではない

格差社会をもたらす思想的な背景として、知的能力・健康、身体的優位性を過度に求める価値観、こういうものがやっぱりある。こういう考え方は能力を非常に単純化し多様性を否定する、弱さを排除する風潮は今の時代強まっていることを認めなければならない。

これは障害者の問題だけではない。この相模原事件で我々が本当に深いところから打ち返していかなければならないのは、こういう世の中の風潮に対するものだと思う。

「生きにくい人」が世の中にあふれている。

生きにくい人々

- ・生活困窮者、ホームレス
- ・孤独死、自殺率の高さ、ゴミ屋敷
- ・ひきこもり、中高年のひきこもり
- ・薬物依存、ギャンブル依存、摂食障害
- ・認知症

- ・虐待、ネグレクト
- ・子供の貧困

※障害者福祉の支援者がリーダー役！

障害者だけが生きにくいわけではない。その時に、だからこそ、障害者福祉で働いている職員さんに大いに期待をかけたい。なぜかという、生きにくい障害のある方たちにこんなに寄り添って、彼らをなんとか幸せにしようと、まだ数は多くないかもしれませんが、考えて成功している人たちが、我々の障害者福祉にはたくさん出てきている。たくさんあるが、一つだけ紹介します。

生きにくい人をどう支援するか

強度行動障害を受け入れるグループホーム 北海道「はるにれの里」

151人の入所者のうち102人が支援区分6の強度行動障害

よく強度行動障害というのがあります。自傷他害パニックをおこす。息子も少しあるが、私も頬に少し傷がついている。決して彼は乱暴だとは思わない。我が儘とも全然違うと思う。聞きにくくて、我々が彼の思いをくみ取れなくて、間違っただけをやってしまい、彼を混乱させて、ますます行動障害を引き起こしてしまっている。

こういう方たちはよく精神科病院の閉鎖病棟や入所施設にお願いするしかない、ずうっとそんなふうに思われてきた。今結構グループホームでも引き受けてくれるところが出てきた。たとえば、北海道にある「はるにれの里」という有名どころです。

普通グループホームって強度行動障害なんて絶対に受け入れてくれないのが常識なのですが、ここは結構受け入れています。いっぱいグループホームを持っていて、2年前に訪問したんですが、151人の入所者、そのうち強度行動障害で支援区分6の判定をもらっている人が102人。ひとりいても成り立たないと言われているのに、5人定員ですべて強度行動障害、すべて支援区分6。こんなものいっぱいあるのです。行動障害と言っても半端じゃない。自分の指を肛門に突っ込んで腸を引きずり出して血だらけにしてしまう。普通こんな人は絶対グループホームで受けない。しかし、ここは受ける。普通受けたら何を考えるかという、そういう行為をさせないために、拘束具などをするのですが、ここはしない。そんなことをしたらますます行動障害を起こす。

アセスメントを入念にして、何をアセスメントするかという、この人が好きなものは何か、得意なことは何か、何をやっている時にテンションが上がるか、ポジティブな面をいっぱい探し出す。

そこを中心にして居住環境を組み立て、日中のプログラムを組み立て直し、彼が一番得意でプライドがもてるようなことをどんどん増やしていく。そうすると行動障害が減っていくと言うんです。すべてこれでうまくいくとは思いませんが、多くの場合、環境を変えたり、コミュニケーションをうまく変えることによっておさまる。小さな小部屋を作ったり枕元の蛍光灯の色を工夫したりしています。ものすごい苦勞をして試行錯誤をしながら何年もかけて、一人ひとりにあった環境を作っていく。落ち着くのです。ティーチプログラムといって、次のやることを写真で示して見通しがつくようにする。写真で分からない時は現物を示しておく。本人と職員さんだけで通用するコミュニケーションツールもあった。

我々はペットボトルを見てお茶と分かるが、自閉症の人はこれのどこを見てお茶と認識しているのか分からない。容器の形かもしれないしキャップ色かもしれないし、マークかもしれない。

こういうことを一人一人とつき合う中で、この人は何を示すと次が分かるのか、

職員さんが手探りで汲み取っている。

こんな人がいます。昼間は非常に落ち着いているのに、夜になると時々大暴れして、手に負えなくなる。職員さんにとってやっかいで危険な障害者です。

しかし、ある職員さんは考えたんです。じゃ、何で昼間はこんなに穏やかなのだろう、何で毎晩暴れるわけではないんだろう。いろいろ観察して、試行錯誤をしていく中で有力な仮説が出てきた。

月の光に反応しているのではないかという仮説です。記録をとっていくと、新月から数日間は非常に穏やかなのに、満月の前後は混乱して暴れる。それが分かっただけからこの人に対する職員の見方が180度変わる。訳が分からないところで暴れるやっかいで危険な障害者などではなくて、月の光に傷つけられている人で、我々が月の光から守ってあげなければならない障害者になるんです。

満月が近づいて来た時に職員が相談して、遮光カーテンをつけたり家具の配置を換えたりして、見事に彼を守ったそうです。その時の穏やかで職員さんに寄せる信頼はすごいものがあつたそうです。

これを聞いた時に、福祉の仕事はすごいと思った。こんなの絶対に人工知能やロボットではできないですよ。これから人工知能やロボット、ITが人間の仕事に変わってくるが、絶対にそれではおさえられないものがある。

この方は長年誰にも理解されずに厄介者扱いされて独りぼっちで生きてきたんですよ。この人の生きにくさに気づいて守ってくれる職員が出てくるんです。やっぱり福祉に大きな期待をかけたいと思います。

職員のアイデンティティを変えなくてはいけないと思います。

職員のアイデンティティを変える

かわいそうな人を預かってあげる できない人を支援してあげる

単純労働者、3K職場

「保護者の疲れ切った表情」「職員の生気のない瞳」「障害者は不幸を作る」（相模原事件の容疑者）

↓

生きにくさを理解し、適切な環境や支援によって障害者の幸せを創出する。
障害者の豊かな地域生活を支援し、社会に多様性をもたらす。

↓

クリエイター、科学的専門性、ディーセントワーク

とってもクリエイティブな創造性に富んだ仕事をしているはずなんです。それはいっぱい出てきている生きにくい人たちに寄り添って、彼らを救っていく、どうやって奥の深い包容力にあふれた社会を作り出していくのか。

障害者福祉の現場がそれを作り出せる一番有力な資源をもっていると思う。

相模原事件がもたらしたものに対して、我々は深いところから強い、そして息の長い進捗で風潮を押し返していけるのは、こういうところを足場にしてやっていくしかないのではないかと思います。

村上 満 氏

まずは施設は被害者なのか、というところでやはり本人を守るのは職員であるというなかで、職員自身が冷え切った冷め切った或いはレベルが低い質をとることではなくて、やはりしっかりとアイデンティティを持った上で、自分たちがよりクリエイティブなそういう支援をしっかりとやっていける場所なんだということを伝えていく大事な場所でもある。

職員自身の意識改革とかどんなふうにあセスメントをしっかりと、利用者さんと信頼関係を築く中で、多様性が認められる社会の中にむすびつけていかれるようないいお話でエールをいただいたように思います。

また、当事者性という観点からした時に、今回の事件で19名の方が匿名になってしまった。やっぱり当事者からしっかりと声を上げていかないと、ソーシャルアクションにつなげられないんじゃないか。だからこそ、そういった生の声を、生の姿を、文屋さんをはじめとする報道機関がもっと記事を風化させることなく、こんな顔や姿を見せられる記事を、もっと多く出していかなくてはならないんじゃないか。

そういう意味で、文屋さんだからこそ、報道機関におられる人だからこそ、なかなか自分なりに律されるようなこともおっしゃられたように思います。ありがとうございました。

施設を経営する立場、小学校教員を40年間子供さんたち、その中でも大半を障害児教育に携わってこられ、そして保護者でもあるということ。二足のわらじどころかいくつものわらじを履いておられる穴田さんから今回の事件や会長のご発表やご意見から思うことをお伝えいただけたらと思います。

穴田 清 氏

50数年間育成会の仕事に携わってきました。その間施設作りとか様々な形でしてきました。

今夏のこの事件で、今私たちがやってきたことが、本当になんだったのかと、子供たちの幸せのために施設を作り、作業所を立ち上げてきたけれども、障害者はいらぬんだという発想で、それが社会に蔓延したとすれば、私たちはいったい今まで何をしてきたんだろうかと改めて考えざるを得ない。

これではいかんのではないかと考えるが、先ほどから少しは見えてきたが、新聞その他では見えてきたものがほとんどなかった。容疑者が病院の措置を受けていたとか、それが適正だったのか、もっと病院に入れておかねばならなかったのかとか、施設の鍵が十分かかっていなかったのではないかと、そんなことばかりだった。なぜ、こういうことを容疑者が起こしたのかという背景が全く見えてこなかった。

これで果たして子供たちを守っていけるのか、ということで実際の様子を分かれる久保会長に来ていただいて話を聞こうと思ったわけです。

容疑者が3年間この施設で働いていた人である。知的障害者のことはよく知っていた。こういう青年が起こした事件をもっと突き詰めて、どうして起こしたのかを考えていかないと、私たちは保護者としてどう活動していくか、という方向性が見えてこない。見えてきたのは施設に扉や門を作れ、国から補助金を出してやるからとか、それから防犯上のためにカメラをつけるとか、或いは各部屋に鍵をかけよとか、そういうことの決定ばかり言われて、何が起こったかということが分からない。

この施設は県立の大規模施設だということを聞いた時に、ああ、大規模施設では、職員に徹底したものがないんだなあ、古い施設で保護者も施設任せになっている、施設の園長さんなどは何年間かで他の施設やポスト代わっていきける、そういう思いもあったのではないか。職員の中にもそういう思いがあったのではないか。それが本当にそうなのかどうか知った上で、私たちのこれからの運動に生かしていかなければならない。

それから職員に対する教育はどうなっていたのか。本当にしっかりと研修されていたのか。もう一つ、親たちはどのように関わっていたのか。

私は溪明園を立ち上げた時から30年間保護者会長として、親たちに、月1回の面会には顔を出してくださいよ、と言ってきました。なぜかという、昭和43年に私の子供は黒部学園に行きました。措置制度の時代です。その時の園長さんは村上さんとおっしゃって、後に、大沢野町(現富山市)の教育長にもなられた方ですが、私たちに、しょんぼりして隠したい、恥ずかしいという思いの親が大勢いる中で「この子供たちを守るのは親である。親が守らないで、誰が守るんだ」と毎回のように言われました。そして、私たちの沈んだ気持ちを慰めたり諭したりされたのでした。時には叱ったり、様々な言葉で元気づけてくださった。

私は50年間あまり育成会の活動に関わってきましたが、原点は村上さんから言われた言葉です。

社会の人たちは、かわいそうだとかいろんなことをおっしゃってくださいますが、障害の子をもったことで初めて分かる思いもあります。健常者の親では分からないこともあるんです。だから、健常者の方にすべて分かってほしいとは言いませんが、私たち親が、親の気持ちを健常者にどう伝えていくか、どう協力を求めていくか。ただ、なんとかしてほしい、施設を作ってほしい、応援してほしいだけではだめなんです。どういう思いでいるかということ伝えていかなければならない。

「あんな子供を持っていたら大変だろう、死んだ方がいいのではないか。」という言葉は何回も聞いたことがあります。だけど、親の立場から言えば、本当にかわいい。親としてつらい思いをしたこともあるが、育てているうちに親の愛情が増える。子供のなつく姿を見ながら、なんとかしなくてはと思いながら育てていると愛が増し、情が移る。健常な子供以上の気持ちをもつ場合がある。

そんなかわいい子が何で障害をもって生まれたのか。親のせいでも本人のせいでもない。しかも、誰もがそうなる可能性があるということを私たちは世間の人々に伝えていく必要がある。そういうことを思います。

溪明園の保護者会の世話をしながら、常々そういうことを言ってきました。しかし、薄れていく人もある。出席率が下がってくると、その親たちは日々子供の顔を見ていないから、ついつい情が薄れていく。そしてさらに出席しなくなってくる。そうすると必ず施設に対する見方・考え方も薄れてくる。

親として何をしなきゃならないかということはこの事件の中でしっかり学んでいかななくてはならない。次に生かしていかなければ、育成会活動は前に進まずその意味がなく、障害者は安心して社会の中で生きていけないのではないかと思う。

世の中では、地域社会に移行しろ、そして、地域の中で生活しろと盛んに言われますが、今回の事件が起こった後で出てきたのは、鍵をかけたり塀を作ったりして外に出られないようにする方向が強く打ち出されてきていることくらいです。

親が頑張らなくては子供は幸せになれない、ということを絶えずしっかり考えていく必要があるということです。

村上 満

今回の事件をきっかけに、さらにどんな活動を親としてやっていかなければならないのか、それがまた、育成会の活動としてどんなふうに発展に結びつけていけばいいのか、そういうことで親の頑張りが大変重要だというお話でした。

久保会長から先ほど、ゴミ出しの範囲から我が子が障害者だということをお伝えしていく、存在感を示していくところからちゃんと姿を見せていくということも非常に大事だとおっしゃったことが印象に残っています、お三方のご発言を受けてまして、何かコメントしていただけることがありましたら、よろしくお願ひしたいと

思います。

久保 厚子

関哉先生の優生思想の部分は出生前診断もあり、それについては育成会は賛成の立ち位置はとっておりません。出生前診断をして、今はほとんど90数パーセントの人は障害があると分かたら堕ろしておられますので、私たちの子供はいなくていい存在に結びついてしまうな、と私自身は考えます。

ですから、旧優性保護法については、何かの形で育成会としても少し『手をつなぐ』か何かでコメントしていかないとだめだなあと思っています。今ちょっと文章を考えているところです。三役会でも話になっていますので、そこで、育成会としての意見を言っていきたい。

それから、穴田さんがおっしゃったように、親が守らなくちゃというのと、入所したら親は守れないし職員が守れないとという話だったんですが、私は両方とも共感できるんですね。思いとしては私たちは障害者の方に対するやまゆり園事件で出した声明ですね。「私たちが全力で守ります」とを言ったわけです。それは親の気持ちなんです。実際に守れませんし。だけど親だったら今我が子を狙われていたら、前に立ちはだかって守るでしょうってことなんです。その気持ちを私たちは、心配しなくていいよ。お父さん、お母さんが守るから、という親の気持ちを表した文章なんです。それはそれで、親は全力で我が子を守るという気持ちは常にあるということは大事なことだし、それを持ち続けることも大事だと思います。

しかし、職員の人や周りの方たちが一緒に守ってくださらないと守り切れませんよね。ですからそういう意味で、三者合同で本人を中心にしながら逃げていくという、地域の住民もそうですし、支援者もそうですし、親も一緒になって本人を守りつつ、一緒に行動していくということをやっていないとだめだと思っています。そういう意味で、周りの方も一緒に守ってほしい。

野沢さんは、施設の側から自分たちは守るとなぜ言えなかったのか、と仰ってくださったので、そうだな、と思っています。

私はもっと早くから野沢さんとも前に話をしていたんですが、日本の国、その政府そのものが障害のある人をそういう目線で見るのはよくない。国としてもちゃんと守っていくよって。暮らしにくい人をみんなで守らないとだめなんだ。国からもっと強いメッセージを出してほしかったなあと思っています。

そんな話を野沢さんと以前に話したことがある。そういうことをみんなに気づいてもらうために、野沢さんも言われたように、写真いっぱい宣伝の新聞を出そうかという話も出ていたんですね。

私たちはどういうメッセージを出しながら、皆さんに気づいてもらうか。無意識、無関心の方はいっぱいおられますんでね。私たちはそれをこれから考えていかなければならないと三人の方のお話を聞いて、さらに思いましたので、一緒に考えたいと思っています。

村上 満

やはり無関心の方々、或いはそんなことさえ気づいておられない方々に、また、風化させないために、非常に大事なテーマを今日は挙げさせていただいています。風化させないためにこれをしっかりと語り継いでいくために、家族・育成会はどうすべきか、或いは報道機関はどうすべきか、或いは専門職はどうすべきか、今日はそんなことを、後半の第二部でつなげてみたいと思っています。

パネルディスカッション 後半 意見交換

※<罫線で囲ってある部分は、
プロジェクターで表示したものです>

村上 満

風化させないためには我々は何をするべきかと、今度は穴田さんからこっちへ順番にお話をいただきたいと思います。



穴田 清

先ほど施設側の状況が全く分からないという話を聞きました。公表されたものの中から出てきたのは、親たちの姿が全く見えないということでした。我が子が殺されておりながら、報道されなかったということの理由に、親は我が子に障害があることを恥ずかしいと思う人は今でもいるということがあります。

50年前はほとんどがそうだったと思います。施設を作ろうとした時に、我が子を後ろに隠したり、その子が戸籍に乗せていなかったり、近所の人があそこの家には30才を過ぎた人がいるはずなのに、一度も見たことがないという方もたくさんいた。そういう方たちを掘り起こして施設を作った。



行政へ行ってもそんな施設に入る該当の人はいません。今二人いるのはどこそこの施設に入ることになっているから、とおっしゃる。そんなはずがない、私の市に20人近くいるのにあなたの市に二人ということはないでしょう。なんとか実態調査をしてください、とお願いしたがなかなか聞いてもらえなかった。

今度は西部社会福祉事務所へ行って、所長さんにこういう状況でなんとか実態調査をしてほしいとお願いして、西部社会福祉事務所長の名前で12市町村へ実態調査をしていただいた。その市から20人あまり上がってきた。それくらい隠そうとする。行政自身も当時は積極的ではなかった。そして、そんな人たちが施設に入っていた。

我が子が殺されているのに、なぜ名前を公表しないのか、健常者だったら親の承諾もなく当然公表されるのに、今回はされない。警察は親のプライバシーを考えた時に、それが適切だったと判断したと書いてありました。私は一人や二人のそういう親がいるのは分かるが、家族会としてなぜそれをきちっとできなかったのか。なぜ自分たちの子が殺されたのに、虫けらが殺されたかのように名前を公表しなかったのか、と思うと残念で、本当に悔しい思いをした。

だからこそ、もっとその原因を追究して、親はもっと前に出て、我が子を守るのは親なんだという意識をもたないといけない。そうしないと、施設に預けたらもうそれでお任せという親がたくさんいます。それではだめなんだ。確かに、職員にも施設にも一所懸命やってもらわなければならないが、だけど、やっぱり親の熱意や

家族の協力がなかったらその子たちを守れない。その子たちは何もできないんだから、やっぱりその子のために親や家族が前に出て、社会一般に協力をお願いする姿勢がなければだめだ。

今回もなぜその親が名前を出さなかったのか、そのことの原因は何なのか。単に恥じていたとか、或いは施設に入っているのは不名誉だとか、そういうことだけだったのかということを考えたい。或いは、神奈川という地域がまだそういうところなのか。

私は砺波地域では、おそらく半分、いや、もっとたくさんの人が名前を公表しないだろうと思う。私は、「溪明園」を立ち上げてからもいかにして地域の人に私たちの子をどもを知ってもらおうかということが一番先に掲げてきました。

施設を作る頃は、呉東に施設があって、なぜ呉西にないのかと考えた時に、やはり私たちの子供を身近に見ていただいていないところに問題があるのじゃないかと思いました。それで、なんとしても呉西地区に作りたかったです。なかなかできなくて、そういうときに「むつみ園」が上市にできました。上市町、宇奈月町、朝日町の3町で作ったものでした。それなら、呉西と言わずに、砺波地区に作れば良いと思って運動を始めました。

なかなかうまくいかなかった。親の会を作ろうと思っても、自分の家に障害の子がいることが分かるので、会長は引き受けられないという方もいた。そういう方を一人一人説得しながら育成会を作り、陳情してまわってお願いして施設を作った。そういう動きの中でも、参加してくれない人がたくさんいました。しかし、できあがるとその協力しなかった人でも行政の指導で、該当者として施設に入ってくる。一所懸命協力した若い親たちの中には「あの人たちは全然協力していないのにどうしては入れるんだ。なぜうちの子たちは入れないんだ」と抗議する者もあった。最もその子らは、支援学校の生徒で年齢的に入れなかったんだけど、「私らが協力をお願いに行っても協力しなかった人たちの子が入っているではないか」となる。だから、溪明園の増床で募金運動をする時にその若い親たちには「反対します」と言われた。だけど、なんとか協力してもらった。「私に元気があったら、もう一つ施設を作ろうじゃないか」ということで、納得していただいた。そうして増床を成し遂げて、次に南砺地方に作ろうということで、「花椿」を作った。

その時に皆さんと話したのは、いかにして地域の人に理解してもらおうのかということでした。砺波地域の全家庭から500円の募金をお願いする封筒を渡した。なぜ、全家庭かということ、寄付してもらおうことよりも、自分たちのお金である施設を作ったという意識をもってもらいたかったからです。そして、砺波地域12市町村にお願いして廻りました。なかなかそれも大変でした。12市町村でそれぞれ募金の方法は違っており、一律には言えないのですが、小矢部の場合は婦人会にお願いしました。各市町村で婦人会が活発なところもあるし、農協婦人部が活発なところもあるし、社会福祉協議会が募金の中心になっているところもあった。それで、それぞれの町や村へ出かけて説明し、協力をお願いした。

そういう経緯の中で「花椿」を作り、その後、砺波地域の作業所を統一して「手をつなぐとなみ野」として作業所を法人化して今日に至った。ようやく地域の人たちに認めてもらった矢先に、今回の事件が起きた。そして、鍵をかけ、門扉を作って人があまり出入りしないような方向になるという。

これは何か逆行しているような感じがしてならない。そうじゃなくて、もっともっと開かれた施設の中で、そういう人たちを暖かく見てもらえる社会というか世の中を作っていくためには、先頭に立って動くのは親でなければだめだと私は思って

います。

もちろん昔に比べて、今は非常に理解が深まり、協力してくださる人もたくさんできました。だけれども、障害をもった子供の親でなければ分からないものがあります。そういう気持ちを前面に押し出して運動をしていかないと、なかなか前に進まないと思います。

これからは少子高齢社会になります。もっと厳しい時代が来ると思います。けれど、そういう時代でもお互いに障害があるとか高齢だとかではなくて、その地域の中で生きていけるような社会を作り上げていくためには、やはり私たち親が先頭に立っていかなければならない。私は親の立場で話をしていますから、親の方たちに強く求めていきたい。

施設を作ってもらって当たり前、施設で預かってもらって当然、のように言う親もいます。そして、中には、自分の子供を中心にしたものの言い方で、職員に対して注文をつける。あの子はうちの子をいじめるから、あの子をどこか他所に持って行け、持って行ってほしい、とかいう声も聞きます。だけれどもそんなことができるわけがない。

一人一人の子供にどう関わっていくか、どうしたらみんなで共同生活ができるか。これは施設ですから一人や二人を見るわけではない。もちろん一人一人は大切にしてもらわなければならない。だからといって、あの子を他所へやれとか、排除できるものではない。しかし、そういうことを求める親もいるわけです。

そうではなくて、もっと親と職員が協力していかなければならない。

施設の職員みんなが一所懸命やってくださっているのに、みんなは本当にどれだけ感謝しているのかなあ、作業所で職員が一所懸命世話をし、いかにして工賃を上げようと努力しているのに、親たちは本当にどの程度感謝しているのかなあと。もっと感謝をし、また、一緒になって、この子供たちを守るために活動していかなければならない。このようなことを強く思っています。

村上 満 氏

ありがとうございます。風化させないために親の立場から、ということで、今回なかなか親の姿が見えなかった。だから、そここのところの原因をしっかりと見極めていく必要があるだろうと。その中で、親もしっかり前を向いて、施設にお任せではなくて、親の熱意や協力なくして、我が子を守れないんだから。

親がやるべきこと、或いは、社会に何を伝えていったらいいのかをしっかりとやっていかないとだめだ。そのために、地域にちゃんと知ってもらうために、穴田さんが溪明園や花椿などを作ってきたその過程で地域にどう理解をしてもらうのかと、そんなエピソードも交えながら、しっかりと感謝しながら、職員或いは親、そして地域の皆さんと一緒にやっていくため活動をこれからも引き続きやっていくことが風化させないために大切なことではないか、ということをおっしゃっていただいたと思います。

1年の追悼式の時にこんな新聞記事がありました。「津久井やまゆり園の追悼式の壇上に命を奪われた19人の遺影はなく名前も呼び上げられなかった。黒岩知事は、式典後『本来ならば19名の名前を申し上げ、遺影が飾られていても不思議ではなかった。しかし、また、それが許されない日本の現状をとて残念に思う。』と胸中を吐露。一人一人のエピソードの紹介にとどまったことを『大きな宿題をもらった』とし、『障害者を特別視しない真の共生社会を大きな目標』と改めて強調した。」こんな記事が出ていました。

「まだ許されない日本の現状」なのか。これが本当の日本の現状なのかな、と私も首をかしげながらこの記事を読ませていただきました。まあ、それだけに記事っていうのは非常に大きなインパクトを与え影響力をもつものです。その最前線に立っておられる野沢さんから、この風化をさせていけないために、先ほどもいろいろヒントをたくさんいただいたのですが、少しまとめていただきたいと思います。

野沢 和弘 氏



黒岩知事ですね。風化させるとか残念な状況を作っているのは知事じゃないですかね。だって、神奈川県警に匿名で発表させたのは、やっぱり、トップは知事ですからね。神奈川県が匿名で発表するようにしてるわけですからね。それは首長さんの力はすごく大きいですよ。首長さんが本気になってやろうと思えば、かなりのことができます。それもやらずに、他人事みたいにこんなこと言ってるっていうこと自体が、何なんだろうと思

う。

ご指摘にあったように、風化させないって、どう考えてみても風化するんだろうなって思うです。私メディアの立場で30年以上やってきて、メディアの力は大きいことは大きいですよ。けど、限界をすごく感じてるんです。戦争にしたって、ずっと終戦記念日の前後はテレビでも新聞でも報道します。でも、読まれないですよ。だんだん、だんだん。阪神大震災だって、東日本大震災だって、1周年、2周年、3周年とそのたびに大きく報道してますけど、やっぱり、視聴率も読者もついてこないですよ。それはそうだろうなって思うんですよね。どんどん日に日にいろんな課題が出てきているわけで、ずっと過去のことだけ大事にしていくって、私はそうしてほしいと思ってるんですけど、やっぱりそれは人の世の常だなんて思います。

この事件を風化させないように努めなければならないんですが、でも、本当の目的は風化させないことじゃなくて、こんなような事件を二度と起こさせないことだと思うんですよ。風化してみんな忘れたって、こんな事件が起きない世の中にするにはどうしたらいいのかあって、やっぱり新しい人たちに、その都度、障害のある人たちの本当の姿を伝えていって、この人たちが生きる価値がないなんて、とんでもない考えだということに気がついてもらえるように、我々はいろいろ工夫してやっていかなければならないと思うんです。戦争の報道にしたって、終戦記念日、東日本大震災にしたって、やっぱり、まだまだ人々の関心をつなぎ止めておく努力は、国は足りないなって思います。難しいことです。

もう一つ言いたいのは、私も親ですから、子供を守りたい。絶対守ると思います。生きてる限り。本当に守れないのは自分がいなくなった後ですよ。ここをどうするか。ずうっと怖いから避けてきたんです。見ないふりをしてきたんです。でもやっぱり、ここをきちんと見ていかなければいけないと最近思ってます。

私この年になると、会社でも家庭でもあんまり当てにされなくなってきて、ありがたいことに。昨今評判の悪い裁量労働制なんですね、新聞記者っていうのは。それをいいことにあちこちで歩いたり本業以外にもいろんなことをやっているんです。いくつかの大学へも行っているんです。そのことを少し紹介したいんです。

おまけのような人生を生きる人はいない。悲しい時は悲しい。つらい時はつらい。幸せな時は幸せ。死ぬ瞬間まで真剣勝負じゃないの。

A L S の岡部宏生さんと障害者のリアルに迫る東大ゼミ

あの東京大学で、5年ほど「障害者のリアルに迫るゼミ」というのをやってるんです。学生の自主ゼミで、私が担当の講師をしています。ゲストを呼んできて、学生に話を聞いてもらうんですね。A L S 筋萎縮性側索硬化症という神経難病の岡部宏生が毎年のように来てくださるんですね。岡部さんはもう全身動きません。このA L S というのは発症して3年から5年であつという間に動かなくなるんです。人工呼吸器と胃ろうをつけて生きています。このような状態の患者さんがこんなに生きてるのは日本だけなんです。人工呼吸器が保険適用されるからです。その代わりに非常に医療費がかかります。それは我々が負担している面もあります。

この命をどうやって受け止めているのか、ということが我々の社会が問われていることです。で、岡部さんはどうやってコミュニケーションをとっているかということ、脛が少し動くんです。それに唇の形がちょっと変えられるんです。それで、母音と子音を合図して、それを隣の介助者が読み取るんです。あ、い、う、え、お、「お」ですか。「と」ですかとか言いながら、一つの文字を特定して、一文字一文字でコミュニケーションをとっていく。

最初この方がゼミに来てくれたときは、学生たちはどん引きだったですね。本当にこの人生きてるんだろうかみたいな感じでした。岡部さんこの体で海外旅行なんかどんどん行くんですね。ついこの前もシンガポールへ行ってきました。国際会議に参加して自分の意見も述べます。アイスバスケットチャレンジという氷水を頭からかぶるようなイベントにも参加するんですね。

そんな話を聞いているうちに学生の方がどんどん変わっていった。ゼミの後で、同じキャンパスの中にあるレストランで懇親会をやるんですが、岡部さんも3時間くらい付き合ってくれるんです。学生は遠慮なく平気で飲み食いしてますけど、岡部さん胃ろうですから口から飲み食いきないんです。それでも胃ろうのキャップを外してもらってワインをジョボジョボ注いでもらったりなんかしていました。9時過ぎの最後の場面で、1年生の男子が岡部さんに対してこんなことを言い始めるんです。「僕は東京大学に入るのを人生の目標にしてきました。今、その目標がかなってからは実は何をしたいか、分からなくなってます。岡部さんを最初に見たときに、なんて不幸な人と思えませんでした。生きる意味や価値があるんだろうかとさえ思いました。ところがいろんな話を聞いたりいろんな映像を見ているうちに、一体どっちが幸せなんだろうかと分からなくなってきました。岡部さん、今あなたの病気が治ったとします。僕たちみたいに健康な体を手に入れたとします。でも、ここにボタンがあって、このボタンを押すと今の動けない体に戻ります。あなたはこのボタンを押しますか」と聞いたんです。

岡部さんの脛と唇が動いて、介助者がそれを読み取りました。「絶対に押します。」どうしてですか、ってみんなが周りを囲んでいるシーン（画面のこと）ですが、又、脛と唇が動いて、「体が動かないのは不自由だけれども、心が動かない不幸の方が私には耐えられないからです。」と。

学生たちは言葉を失って誰も何も言えなくなりました。1分、2分、3分、4分と重苦しい沈黙が流れていき、ただみんなじっと耐えているだけです。全身動かない岡部さんが、元気な前途有望なこの東京大学の学生たちに対して「君たちの心

は動いているのか」って聞いているんです。

相模原事件のあの植松容疑者は警察の調べで、こういうふう言ってるんです。「未明に施設に入った後、一人一人の障害者が寝ているベッドの横に行って、声を掛けた。全く反応がなかった人から優先して首を裂いた。こちらが声を掛けても反応できない人は生きていく意味や価値がない。だから自分が安楽死をさせた。」と。岡部さんがもしあの場にいたら真っ先に殺されてもおかしくないです、彼全く動けませんから。じゃあ、この方が生きる意味がないのか、価値がないのか、もう一度考えたいと思います。植松容疑者にも機会があれば岡部さんのことを聞かせたいと思います。まあ、分からないと思いますが。

私逆だと思いますよ。たった1回の授業でたった一言でこれだけの東京大学の現役の学生心をつかんで、価値観を揺さぶることができる人が一体どこにいますか。これ岡部さんだけじゃなくて、もちろん知的な障害をもった人たち、自閉症の人たち、東山直樹さんなども来てくれましたけどね。いろんな方が来てくれました。親も来ました。支援者も来ました。私は端で見ていて、怖くなるくらいに学生が変わっていくのを感じました。

一人の優秀な男子学生がいました。彼は、麻布高校で学園祭の実行委員長を務めて、現役で東京大学に入り、ハーバード大学と提携したイベントでは東大側のリーダーまで努めた。その学年では有名な男です。彼は2年、3年でこのゼミの幹事を務めてくれました。3年生が終わったときに、「僕はあと1年ずると学生を続けるわけにはいきません」と逃げるようにして海外へ飛び出していった。そして戻ってきてから、高齢者のヘルパーをやったり障害者施設で働いたりしながら、生きるって一体何なんだ、と自分でも答えが見つからないような答えを求めてやっているわけです。「お母さんがイライラして怒って、あんたをそんなことをさせるために東大に行かせたわけじゃない、『野沢さんに抗議のメールを送る』なんて言うんですよ」と言うもので、私は「それは止めてくれ」って言ったんですけどね。

で、4年生になって他の同級生がどんどん内定をもらってくるわけです。友だちも優秀ですから、日銀だとか厚生労働省だとか、できの悪い子でも三井住友銀行とかからもらってくるわけです。彼だけは一向に就活をしない。お母さんがやきもきして、彼をけしかけて会社訪問へ行かせるんです。優秀だしコミュニケーション能力も高いのであつという間に内定をもらってくるんです。でも、去年の秋ぐらいに、「相談があるんです」と言われて「どうした、どこにいるんだい君は」と聞いたら、「ちょっと悩んでるんです。いろいろ考えたんだけど、自分の人生だから、後悔したくありません」と言って、内定を全部断っちゃった。「どうするんだ」と言っていたんですが。この4月から滋賀にある社会福祉法人で働くんですよ。給料も安いです。東大という看板を捨てて、でも、自分が本当にやりたいことをやりたいって、しかも、自分から進んで救護施設で働くんですよ。ホームレスとか触法の障害者とか、一番大変で、一番の社会の底辺の人たちを相手にしたいって言うんですね。何があるか分からないけど、今一番興味のあることをやってみたい。そう言うんですね。彼だけではないんですよ。彼のすぐ下の後輩もこのリアルの障害者の衝撃で、どの授業に出ても味気なくなっちゃって、大学まで来なくなって、心配して聞いたら、神田神保町のファミリーレストランでウェイターのアルバイトをやっている。「東大生がウェイターのアルバイトとは面白いのか」って聞いたら「辛いです」「辛いつて何が」と聞いたら、同じアルバイト仲間の女子高校生にむちゃくちゃいじめられる、って「東大のくせにそんなこともできないのか、あほかっ」って、彼そんなこと言われたことないですからね。泣きそうになりながら、「僕は東大の看板を

下ろしたら、ただのカスでしょうか。」そうかもしれないな、とここまで出そうになっただんですが、女子高生に勝てるやつはいないんだとかさんごん慰めましたけど。そんな子たちばかりなんですよ。で、彼らと去年ですが、この本作りました。

本の表紙を映し出した画面 1 1 人のゼミの中心メンバーが障害者のリアルに触れて、自分ていうのは一体何者なのかとか、生きるって、命って何なのかということを実際に書いた本です。これみんなすごいうまいんですよ。是非読んで欲しいんですよ。買ってください。一番最初に出てくる岡崎拓実なんかプロの小説家みたいな文章ですよ。君うまいなあって誉めたら、ありがとうございます、うちのおじいちゃんのおかげなんだと思います。うちのおじいちゃんて？ちょっと有名な人らしいんですよ。誰、誰、って言ったら、僕読んだことないんですけど、知ってます？って。確か永六輔っていうんですけど。お前、永六輔の孫かい。最近永拓実って名前で本書いたり、テレビにあちこち出たりするようになってきてます。

彼らと活動しているとアメリカのADA障害者差別禁止法1990年の当時の担当官にインタビューしたときのことを思い出します。アメリカはADAを作ったときに世界中から注目された。鳴り物入りで始まった。しかし、現実を変えるのは難しかった、と言ってます。

「『ひとつつ制度や法律を作ったからといって、現実を変えるってそんな簡単にできないんです。アメリカもそうだった。しかし、未来を変えることはできる。アメリカは未来を変えた。現実を変えるためには息の長い取組が必要なんだ。子どもや学生にこそ障害者のことを知ってもらうんだ。彼らと触れ合ってもらうんだ。一度固まってしまった価値観はそんなに簡単には変わらない。しかし、まだ感受性の豊かな彼らにこそ障害者と触れあってもらうんだ。すぐには変わらない。しかし、彼らが社会を担うようになった時に、世の中はゆっくりと大きく変わってくる』と言われました。」私もそう思います。

前書きでこんなことを書いたんです。私のような重度の障害がある子がいる親にとって、さっきも言ったように、やっぱり親亡き後は不安です。こんな強がりを持ってても調子いいこと言ってもです。どんなにお金を残したって、どんなにいい施設を作っても、どんなに素晴らしい法律や制度を残したところで、自分がいなくなった後、社会がどうなっているかは、私には分かりませんからね。誰も分からないと思います。

でも、私はこの学生たちと一所懸命勉強したり真剣な議論をしたり酒飲んでふざけ合ったりする時に、錯覚かもしれないけど、自分がいなくなった未来の宇宙に向けて望遠鏡をのぞいているような気がする時があるんです。やっぱり人を作っていくことに尽きるなあと思うんです。

相模原事件を起こした、あの貝のような考えをもった人はまだいっぱいいると思います、この社会の中で。多分これからも出てきますよ。でもそんなものに負けないくらいの強くて優しい心をもった子どもたち、若者たちをいっぱい作っていきたいと思うのです。そんな彼らに次の社会を担って欲しいと思います。

ああ、生きていて楽しい、こんなに面白いもんなんだ。その自分が幸せじゃないと弱い人に優しくなれないんですよ。次の世代に向けていろんなことをやっていく。まあ、それに尽きるのではないかなと思っています。

村上 満 氏

たくさんのメッセージをいただきました。この本の中にも「新しい価値で世界を塗り替えるのは君たちかもしれない」と。新しい価値というところが大事だなあと

思っまして、これからは、どういう価値が、一つの一定の基準だけではなく、いろんな新しい価値を認め合っていくということも非常に重要だなあと。そこには、若者たちが障がいのある方と触れあっていくとか、子どもたちにどんな教育をしていくとか。そういうことは我々の責任であり、社会の責任でもあるなあと改めて思ったところです。

関哉 直人 氏

3人の後で恐縮してますが、皆さんパソコンで検索する時にグーグルというのがありますね。ある文字を入れるとその後によく検索されるワードが出てくる。検索予測システムというのがあります。植松さんですけど、植松被告って入れると次に何が出てくると思いますか。「よくやった」と出るんですね。事件当時ですけどね。賞賛するような声が非常に多かった。



基本的な声の中身として「社会の役に立たない人間」とか「生産性のない人間」とかそういった人を社会に生かしておくことに反対する声が非常に多かった。これは極端な人たちだけではなく、今のいろんな場面で「生産性」というのが一つのキーワードになっている気がします。

僕がすごく違和感があるところで言うと、企業就労がすごく「生産性」と関係してくるんですが、就労ができない、難しい方は、最初から外されているじゃないか、どうなんだ、と言ったら、作業はできなくてもそこにいてくれるだけで場の雰囲気良くなるから、その会社の役に立っているんだ。

ここでも「役割」ってのが求められている。でも実際、それも難しい方もいらっしゃる。作業所なんかでも工賃が高いと評価されるけれども、あの施設多いねって言われるけど、その中でやっている工賃はほとんど稼げないけれども素晴らしい活動ってなかなか社会には評価されない。知る人ぞ知るみたいな。

最近特別支援学校に関わる仕事が仕事上あるんですが、そこで就労に強い（特に東京都は力を入れている。就職率100%を目指しましょうというような学校も増えてきている）学校によっては就労を目指している部門と就労ではなく作業所や次の進路に行くような区分けしていく。試験を受けさせて、そういう学校もある。その時に、学校の会議とかに参加すると就労のことばかり何です。出てくる広報でも就労の場面とか何かの体験販売をしたとか。

働けることが全てみたいなのが障がいの分野にも自然に入ってきているような感じがしてます。その会議に出ると重度の親御さんと軽度の親御さんと二人出ている、重度の親御さんはいたたまれない感じです。いつもそこへ行くと、働くところじゃないところにも光を当てて教育を、という話をして帰ってくるんですけど。我々の中にも自然に入ってきているようで違和感もちます。

優生のことも簡単にさせていただくと、まさに生産性の話なんです。優生思想は生産性の思想で、もともとはイギリスやアメリカからは始まっているんです。それがドイツに流れてまさにヒトラーに象徴される優生的な思想になったんです。だけど、もうひとつ進めてきた国がスウェーデンなんです。スウェーデンはどうかと考えかという、福祉を充実させるということで、国家予算を福祉に充てる。障が

いのある方の一生を国が支えていくという方針を国が打ち出したので、お金がかかります。でも税金が稼げない、生産性がない人たちが福祉の全面的なバックアップになる。その限られた予算の中で、その保護を受ける方を減らしていこうという考え方ですね。まさに生産性に結びついています。

今はどうかというと、昭和23年に始まって、戦後人口過剰の中で、戦争に行った優秀な方々がもう戻ってこない。残っている方でどんどん子どもを産んでいくという社会になっていて、子どもは増えるし、今残っている方は国家から見て優秀な人は少ない。なので優秀な方をできるだけ増やしていく、相対的に増やしていくために優生思想を取り入れるんですね。結局生産性なんですよ。

この生産性のところが今もなおいろんな分野に入ってきているような気がして、ここをどう解決していくかということか、それと対になるような考え方を広めていかなくちゃいけない。野沢さんの話と全く同じなんですけど、命の価値、命の大切さという当たり前のことを当たり前に言っていくということが、今なお大切な時代かなと思います。

専門の分野で言うと、重度の障がいのある方が亡くなった時に損害賠償の請求の事件で、だいたい、損害賠償は生産性を基に賠償額が決まるので、それで決めることはできないという命の価値裁判というのがよく行われています。命の価値を損害額で評価すべきだという、裁判の仕組みからいうと難しいですが、敢えてそれを社会に引き出すという裁判をしていくということがあります。

もう一つは、優生裁判なんかも一所懸命やっついていこうと思っています。社会の声っていうのは必ず反発がありまして、多少の不安も正直ありますね。でもやるっきゃない。自分の使命だと思っています。皆さんもそれぞれの持ち場で命の大切さ、命の価値を訴える機会があれば、是非していただきたい。

今日、障害理解を求めるキャラバンが実演されましたが、全国のキャラバンでは、障害理解から入らずに、命の大切さってことをまず伝えようというキャラバンもあります。それは何をしているかというと、紙芝居みたいなものを作って、保育園の園児とかに、とにかく命は大事なんだという話をして、次に社会には、いろんな人がいるんだけど、車いすに乗っている人とかいるんだけど、みんな同じ命だよ。みんな同じ人、人間、同じ命だってことを伝える。

単純な紙芝居であるけれども、やっぱり原点に戻ればそこなんだろうなと思います。そういうところで、障害理解と平行して、もちろん同じくらい重要なんだという意味で、命の価値や命の大切さを伝えることを、みなさんもお子さんやお孫さんに改めて、命が大事だということを伝えながらやっていっていただけたらありがたいなと思います。

村上 満 氏

生産性ということを引き合いに出しながら、それではない、また違う価値の中でしっかりと認め合っていく考え方も大事だということも分かりました。

先日卒業式で、中学校の校長先生がダーウィンの種の起源の言葉を出されました。「最後に残るのは強い者でもない、賢い者でもない、変化に対応できる者なんだ」という言葉を卒業生に贈られたんです。

変化に対応できるというところに、今我々が求められているいろんな柔軟な発想や新しい価値を認めていくとか、また、いろんな考え方があってしかるべきだということをしっかり受け止めていかなければならない、と考えています。

全国育成会連合会では風化させない、野沢先生は風化させないというより二度と

起こさせないことが大事なんだというメッセージをいただいたんですが、どのようなことを最後にお伝えいただけるでしょうか。

久保 厚子 氏

私も前からちょこちょこお話しさせていただいていますが、人間って忘れてしまう動物ですよ。忘れないとまたいろんなことを乗り越えて、前向きに行けないというのが人間の動物としての在りようなんだろうなと思います。だから、事件そのものは先ほど野沢さんがおっしゃったように、少しずつ忘れられていくのかもしれませんが、だけでも、事件があったことをきっかけに、私たちがどう動くかで大切なことを広めていくということをする。

やまゆり園事件ということ自体は忘れられていっても、それがきっかけでこんな動きが出てきた、こんな運動があった。そして、それが広まっていって、みんなの共生社会につながっていくという。そこに私たちが結びつけていけるような思いをもって活動しないとだめなんだろうなと思います。

育成会連合会は、大きな柱として障害のある人の人権擁護と政策提言があります。人権擁護というのは皆さんおわかりのようにその人の人権を守り、尊厳をもってみていただくということを皆さんに訴えていく。また、私たちも実践していく、ということです。その上で、政策提言というのは、この障害のある人たちに国の政策として、どうあればいいのか、ということ私たちの側から、こうあればこの人たちはうまくいけるんですということを提言していくことだと思います。ですから、この二つが今育成会の大きな柱になっている。

この二つを行いながら、共生社会に向けて私たちは具体的にいろんな障害のある人たちを、いろんな人に知ってもらうことが必要です。先ほどゴミ出しの範囲からと言ったのもそうなんです。

本人のこと、私たち家族のことを全部分かれと言っても無理ですよ。全部分かってもらわなくていいから、あそこにああいう子がいるんだね、ということ認めてもらう。隣の家にいるんだということを、「うん、そうなんだね」と思ってもらうことが最初なんだろうと思っています。

そういうことから始めていって、みんなが共生社会に向かっていけばいいなとは思っています。そういう意味で、私たち自身もそうですけど、支援者も、周りの人も、やっぱり、「福祉は人が大事だ」とよく言われます。人をちゃんと育てていく。小さいお子さんもそうですけど、周りの人をちゃんと育てていくということも一方で私たちはしていかなければならないことではないかと思っています。

穴田先生がおっしゃっていたように、施設があ的事件を通して、フェンスをしたり、門を作ったり、鍵をかけたり、カメラを付けたらっていうことをいろんなところで聞きます。国からの補助も出ます。ですから、それを使っている施設もありますけど。

実は、今日お話ししませんでしたけど、あの事件の一週間ほど前です。私のところで入所施設を持っていますが、見慣れない人が窓から施設をのぞいていたんです。それを周囲の住民の人が、散歩の途中で見かけて「何かご用なんですか」と声をか



けてくださった。そしたら、その人はさっとどこかへ行っちゃった。「こんな人がいたよ」と事務所に声をかけてくださった、その方がね。で、うちの隣に老人ホームがあり、そのまた隣に通所の障害者施設があるんですね。ですから、後の二つの施設にうちから連絡をさせていただいたということがあったんですね。全然関係なかったかもしれませんが。

地域に開かれた施設をしていると、地域の方がこの施設はうまくやっているのかなど心配していつも見てくださっています。賛成した方はうまくやってくれよと思って、反対した方は問題を起こさないかなと思って、気にしてみてもらえるんですよ。

いずれにしろ、気にしてみてもらえるっていうことがあると思うので、その周囲の住民の方の目というのは、私は鍵をかけるよりもずっとセキュリティになると思います。うちの今の体験からいってそう思います。だから、うちはフェンスもありません。門もありません。鍵もかけません。

鍵をかけるどころか玄関の戸は自動ドアです。近寄ったらさっと開いて、さあ、どうぞみたいな感じです。そんな施設なのです。ですから、地域の方もグランドゴルフに来ていただくということもしていますので、穴田さんがおっしゃったように今よりもっともっと地域に開かれた、地域と一緒に活動していく施設であればあるほどこういう事件が起こらないのじゃないかと思います。

でも、これは元職員だったんですから、中の人間がやったというのがあって、職員研修も十分にやっていただきたいなあという思いと、それから、地域に開かれた施設をもっともっと進めていくことがセキュリティになると思います。

うちの利用者は最初できた時は、初めてできた施設ってなかなか大変なんですよ。落ち着かないんですよ。本人も落ち着かないし職員も落ち着かないし、ガタガタするんですね。その時に利用者のご家族からいろんな声がありました。ある職員は、「『今度お前クビにしてやるからな』とあるお父さんに言われた」と言うんです。「大丈夫、お父さんに人事権はないから」って言ったんですけど。

やっぱり親は第一に子供のことを思っているんですね。だから、親は我が子のことを思っているいろんなことを言う。中には親のエゴもあるけれど、それはいったん受け止めなさいよ、って。文句だと思って聞いたらだめですよ、っていうことを言ってます。いったん受け止めて、そして、職員の側から見て、どう見てもここが課題だ、こんなふうに本人さんは見える、ということは親御さんにきちんと伝えることをしないと。まあ、言わば、この絵柄は（ペットボトルを示して）親から見えても職員には見えないということがある。職員は違う絵柄を見ているのに、親は見えないということがあるんですから。立ち位置が違えば本人さんの見え方が違うわけですから、それを全部合わせて、その人一人ですから。そういう意味でも親の言っていることはちゃんと受け止める。で、職員の立ち位置から見える本人さん像を親御さんにお伝えして、どうしていったらいいのかということと一緒に話し合えるようにしてくださいね、と言ってます。

それと行動障害で、うちは50名定員ですが、7割近い人が行動障害がありまして、ですから、いろんなところが壊れます。直すのと壊されるのとイタチごっこのような感じですけど、それをやりつつ職員がどうしたらよいかを学ばないとだめなんですね。本人さんがどうなるかではないんです。本人さんがなんでこういう行動になるのか、どうしたら安心して暮らせるようになるのか、ということ周りの職員が本人さんを通して学ぶわけです。学んでその環境を作ることによって本人さんは安心して暮らしていけるし、問題行動がなくなっていくということだと思います。

ね。いつまでもね、30才にも40才にもなって、本人にまだ訓練させるとかそういうものじゃないでしょ、と私は思ってます。周りの者が本人を通して学ぶ、そして、その関係を作る。親もその関係を軸に汗を流す。そういうことが必要ではないかと思ってます。

で、そういう熱意のある親が中心となって、今キャラバン隊が全国で40を超えるようになった。是非、ここでもキャラバン隊の募集しておられるますから、入っていただきたいですね。1チームではなかなか難しい。オファーがあっても1チームじゃ人の都合がつかなくて行けなかったりしますね。ですから、2つとか3つとかチームを作ってください、そして、いつでもオファーがあったら出かけて行ける。そういう態勢を作ってくださいなと思います。

キャラバン隊をやるのはとても楽しいです。難しいことを考えて勉強するのと違って、あんなことやってみようか、こんなことやってみようか、小道具作ろうみたいで、楽しい活動ができるのです。

それで、皆さんに障害者の特性みたいなものを理解していただくことになるし、私たちはそこに可能性があれば、キャラバン隊のところに本人さんも一緒に行ってもらって、本人さんとしゃべってもらおうということもやれたらいいな。本人の生の声を届けるということもあっていいのかなと思ってます。

そんなことを育成会もこれから楽しいことをやりながら、地域の方に、市民の方に障害者理解を広めていって、共生社会に結びつけていけたらいいなあと思ってます。そういうふうに進めたいと思ってます。

村上 満 氏

時間もなくなってきましたが、一人か二人の質疑応答を少しとりたいと思います。せっかくですので、どうぞ。

A: 久保会長にお伺いしたいのですが、津久井やまゆり園の事件があってから、どんどん施設が見えない化している。塀とかいろいろ鍵をつけてみたり。その反面、民間というか行政がかんでいないところは、どんどん門戸を開放しているんですよね。その行政のかむところにどうして、どんどん見えない化が進むのか、それを排除する方法はないのでしょうか。

久保 厚子 氏

おっしゃること分かります。入所施設ならなおさらです。クローズドな閉鎖的な雰囲気をもっている仕組みというかそういうものがあるのだと思います。

ですから、それをどれだけ地域にオープンにしていくかというのは、私は、私ところの法人ですが、入所施設ってわりと重度の方がたくさんいますから、重度の支援だとか、ちょっと地域で困りごとをもっているとか生きづらさをもっている人の支援みたいなノウハウを地域に還元していくという、職員がですね。そういうことをやっていかないと、中で何を、誰が、どんなことをしているか分からない存在になってしまう、というのが、入所施設の陥りやすい、立ち位置なんだろうなと思います。

ですから、うちの法人では、行動障害の人がたくさんいますから、行動障害の支援の仕方を地域の中に職員が出ていって、そして、支援の仕方を皆さんにお伝えしたり、そんなことをやってるんですね。社会貢献でもあります。社会福祉法人の。ですから、法人そのものが自分のところにある、もっているものを地域に還元するっていうことが、門戸を開いて出て行く。自分たちも出て行くということをしな

と閉鎖的になる。もっともっと閉鎖的になってしまっていて、この事件があったから本人を守らなくちゃということで、もっともっと閉鎖的になるんだろうと思います。

村上 満 氏

時間が来てますが、どうしてもというか、これだけはという方は、最後のお一人ということでどうぞ。

B：私は、15・6人くらいの後見人をしていたのですが、数年前に脳梗塞になった、左半身が不自由で、自分が障害者になりました。障害者になって、障がい者じゃないと分からないことがありますね。やはり小さい時から触れ合わないといけない。今時はない。夏休みのラジオ体操に参加するなどしないと解決しないと思っています。

村上 満 氏

小さな時から触れ合っていていく。地域の中に存在感を示していくことからしっかりアクションしていくということが大事だと思います。貴重なご意見として受け止めさせていただきます。

最後なんですけど、風化させないための、或いは共生社会を作っていくためのキーワードを掲げていただきまして、説明していただいて終わりにしたいと思います。一言キーワードです。

関哉 直人 氏

「**来年も**」です。毎年活動することが、継続には必要なので、来年度も是非何らかの形でやっていただければと思います。あと「**となみ野キャラバン隊がんばって**」やる機会がないと、なかなか発展していかないので、どんどん呼んでください。それでグレードアップしていくと思いますので、よろしくお願いします。

野沢 和弘 氏

「**リアル**」です。私はこれです。さっきのことです。買ってください。昨日長野の社会福祉法人の職員研修で、もう夜中の午前4時までやってるんですよ。実践発表があったんですけど、放課後等デイサービスで一人の若い職員さんが一人の子どもをコンビニへ買い物に連れて行って、で、悪さをするもんだから、出入禁止になるんだけど、それでも諦めずに行って、コンビニデビューする。

どんどん外に出て行くんですね。本当に本人の姿を一般の人に触れ合ってもらおう、見てもらう。あの建物の中だけで、ごちゃごちゃやっててもなかなか世の中進まない。こういう実践をやってるって言うんですが、私感動しました。こういう小さな積み重ねが、やっぱり世の中を変えていくのかなと思いました。あのリアルな障がい者の姿を多くの人に知ってもらい、見てもらい、触れあってもらうことが大事だと思います。

穴田 清 氏

「**親は強く**」です。私は親は強くならなければだめだということ、いろんな立場で強くなって、前向きでがんばっていきたいと思います。もう一つ、やまゆり園事件を風化させないために、「やまゆり園の日」というものを7月26日に設定して、イベントをやるとか、手をつなぐの会誌に特集を組むとかして、長く忘れないよう

に、がんばっていければありがたいなと思います。

久保 厚子 氏

「今の気づき」「今後の課題」「将来の安心」「語り、学び、広め」です。今日ここでみんな集まったわけですから、今の気づきをですね、今後の課題として活動しましょう。それが将来の安心に繋がるでしょう。ですから、語り合って、学び合って、そして、広めていきましょう。

村上 満 氏

風化させないために、そして、本当に真の共生社会とはどういうものなんだろうということを御提言いただきました。今日は3月25日で、今年度の終わりですが、ジ・エンドにならないように、次年度につなげること、これが一番大事なことということで、今日のパネルディスカッションの結びとさせていただきます。ありがとうございました。

相模原事件から1年 命の重さを改めて考える

毎日新聞社説 2017.7.24

あの事件からもう1年になる。

相模原市の障害者入所施設「津久井やまゆり園」で19人の重度障害者が元職員に殺害されたのは昨年7月26日の未明だった。

植松聖被告（27）の初公判はまだ開かれていない。「障害者には生きる価値がない」という理不尽な動機がどのように形成されたのか、事件の核心部分はまだよくわからない。

同園で暮らしていた障害者は現在、横浜市内にある施設などで仮住まいをしている。悲惨な事件の記憶に今も苦しむ人は多いという。

神奈川県は当初、家族会などの要望を受けて施設の全面再建を打ち出した。しかし、山あいの大規模施設で再び障害者を収容することに対して各地の障害者らから批判が高まり、軌道修正をすることになった。

障害者の意思を中心に

現在、県は4年後をめどに相模原市と横浜市に小規模の入所施設を新設する方針を示している。小規模で家庭的なグループホームもつくり、選択肢を広げるといふ。時間をかけて障害者の意向を確認し、どこで暮らすかを決めるというのだ。

家族会からの反対論も根強いが、障害者自身の意思を中心に考えるのは当然である。重度の障害者についても本人の意思決定を大事にしようというのは国際的な潮流であり、厚生労働省は意思決定支援のためのガイドラインを策定している。

大規模入所施設は各地にあり、高齢で重度の障害者が多数暮らしている。地域生活への移行については、やはり家族の反対が強いこともあり、容易には実現していない。

神奈川県は福祉や心理職、弁護士など多分野の職員がチームで同園の障害者の意思確認に当たるという。今後の日本の障害者福祉のモデルとなるよう期待したい。

再発防止策は混迷している。

厚労省は再発防止のために精神保健福祉法改正案を今年の通常国会に出したが、精神障害の関係者から反対論が強まったこともあり、継続審議となった。

植松被告は措置入院から退院した4カ月後に事件を起こした。このため、自治体や保健所による退院後の相談支援、自治体間の患者に関する情報伝達の強化などが改正案に盛り込まれた。

ただ、障害者の地域生活を支援する福祉サービスは不足している。そちらには手を付けず、退院後の患者情報の伝達や相談ばかり強化するのは「監視」を強めるに等しいとの批判が寄せられているのだ。

また、植松被告は精神鑑定で刑事責任能力のある自己愛性パーソナリティー障害と診断された。現在の精神科医療では治療が難しいとされ、再発防止について精神科医療の枠内で検討すること自体の適否についても議論が起きている。残された重

要課題だ。

個性認め合う多様性を

事件後、厚労省が防犯カメラによる監視や施錠などを強化するための補助金を出した。しかし、植松被告は通り魔などではなく、同園で3年以上働いていた元職員だ。勤務中に障害者への暴言や虐待行為があったことも確認されている。ハード面だけでなく、職員教育や虐待防止研修などをもっと重視すべきだ。

障害者を差別視する意見は今もネットなどで散見される。社会的格差が広がり、自己責任が過度に求められる中で、障害者にゆがんだ視線を向ける人は多いのかもしれない。

ただ、どんな人にも生きる権利はあり、重度障害者もそれは同じだ。肉親や周囲の人々を通して社会に何かしらの影響力を発してもいる。障害のある子からさまざまな刺激や影響を受けて偉大な功績を残した芸術家や経済人は少なくない。

被告の主張は優生思想に影響を受けたものだと指摘される。しかし、優生思想の基となったダーウィンの進化論は、優れたものや強いものが生き残ることを示す考え方ではない。たまたまその時代の環境に適したものが生き残るに過ぎないという自然の摂理を示したものだ。

地球環境や資源の有限性に直面し、未開拓のフロンティアが消失した世界で私たちは生きている。他者の存在を認めない偏狭な考えこそ、現代の環境に適していないと言うべきではないだろうか。

互いの価値観や個性を認め合い、支え合いながら共存しなければ、社会の維持や発展は望めない。あの痛ましい事件はそのことを私たちに訴え続けている。

「キャラバン隊：ぱすてる」～みんなちがって、みんないい～

私たちは、障害者に関わる者として、偏見や差別をなくすために啓発活動をしていきたいと思っていました。そして、「学校プロジェクト」活動は、平成29年2月25日に東京で開催された「全国キャラバン隊フェスティバル」に参加したことがきっかけとなり、意志を固めました。



29年度には、「手をつなぐとなみ野」のプロジェクトとして活動を開始しました。メンバーは5人。何から取り組めばよいのか迷っていました。そんな時に、県大会で千葉縣市川市のキャラバン

隊の公演が行われました。私たちはそれに参加して理解を深めました。また、10月の育成会東海北陸大会では、私たちはスタッフとして、浜松のキャラバン隊の発表のお手伝いをさせていただくという機会にも恵まれました。

しかし、具体的にどう活動を進めればよいのか分からずにいた時、県社協の「福祉教育セミナー」を紹介してもらって、参加しました。

その頃、「身近にいる職員さんや育成会会員の方々から、子育てで苦労したことや忘れられないエピソードを集めよう！！」と各メンバーが聞き取りをしました。それらのエピソードを持ち寄り、発表し合いました。それぞれのご家族のご苦労が想像でき、胸を熱くしたり涙を流したりしました。障害や障害者に対する無知が誤解を生み、偏見を抱き、差別につながることを再認識しました。正しい姿をたくさんの人、特に、子供たちに知ってもらおう、と目標を定めました。そして、改めて、「私達にできる啓発活動を進めていこう！」と決意したのです。

ついに、30年3月25日「手をつなぐとなみ野」の福祉フォーラムで旗揚げ公演が決定しました。寸劇を2～3本準備したいと、シナリオ選びを開始しました。浜松のキャラバン隊の方にシナリオ利用の許可をいただき、また、独自のシナリオも作りました。

旗揚げ公演前の2月28日に、研修の一環として、法人のなかでも発表することになりました。2本のシナリオを中心に、皆で力を合わせて小道具作りや劇の練習を積み重ね、時には、県育成会事務局やとなみ野本部からの応援もいただきながら準備を進めました。リハーサルをさせていただいたことで、反省ができて、それをもとにまた練習することができました。メンバーには度胸がついたのではないかと思います。よい機会をいただきました。



本番の初公演では、県育成会事務局の尾崎さんや関哉先生にも飛び入り参加していただき、精一杯演じることができました。安堵感と満足感でいっぱいでした。

今後は、先にいただいた経験談やエピソードをもとにオリジナルなシナリオ作り、わかりやすい寸劇の考案、いくつかのパターンの考案、そして、具体的にどう展開していくのか、隊員で相談しながら進めていきたいと考えています。そして、たくさんのお小中学校をまわり、児童・生徒や保護者、教員の皆さんに障害(児・者)について理解をしていただきたいと思います。

地域福祉フォーラム アンケート結果

【育成会会員】

・キャラバン隊のねらいはよくわかりました。さらに、演目(場面)を増やされて、世の中の子供たちにわかりやすいステージを目指してください。(古池さんのすねた顔、最高でした！)

・音量にむらがあり、聞こえづらかった時があり。せっかくの機会なので、ハッキリとわかりやすく聞こえていたらよかったのに、残念。

・大変よかったです。

・共生社会はともに生きるだけでなく、手をつなぎ心をつないで生きる社会であること。均一的・硬直的なコミュニティではなく、多様性のある社会がより強い社会であることを強く感じます。津久井やまゆり園の事件は、現在の社会を切り取った事件であり、障害者との共生の難しさを改めて認識させたものであり、決して風化させてはいけないと思います。

・自分自身知的障害や学習障害に悩まされた。

・とてもわかりやすく勉強になりました。今後がんばります。

・やまゆり園の事件など世間では忘れられようとしているけど、私たちは決して忘れられない事件で、これからもっと考えていかなければならないと思います。

・ヘイトスピーチ、ヘイトクライシス、糸賀先生は何をした人でしょう。

・みんなの話し合いがよかった。司会の方に時間の配分をしていただきたかった。無理解に向けての啓発について、キャラバン隊や育成会ががんばっていけなければと思った。津久井やまゆり園の事件を二度と起こさないように、それが一番大事。

・基調講演における久保先生のお話の中での「比べている」とのご指摘はその通りだと気づきました。やはり心の中に無意識のうちに差別感がある自分に恥ずかしさを感じました。

・忘れてはいけない事件だと思った。学校プロジェクトさん、これからもがんばってください。

・人権尊重、親の責務の重要性を伝える！

・障害者に関心(理解)をもち、福祉に携わる人を増やさないとと思いました。自分にできること、行動(実行)できること……刺激を受けました。ありがとうございました。

・全国手をつなぐ育成会で活躍しておられる方々の話を聞き大変よかったです。やまゆり園の事件発生直後、久保会長が新聞でコメントを発表されたのに感動して、私自身も共感しました。今まで地域で仲良く共存していたのが崩れるとすることに本当にショックでした。私たちは今一度地域の方たちに啓発をしていかなければと思います。となみの野職員の学校プロジェクトは大変よいことだと思います。職員の皆さん頑張ってください。

・野沢さんのお話は面白いです。目のつけどころが違うというか、植松容疑者は未知の侵入者ではなく元職員だから、職員だった頃に原因があるのではないかという意見などあまり聞けない意見でした。仕事で悩むことは誰しもあり、そのうまくいかない原因は自分ではなくお客様にあると思って、凶行に及ぶというプロセスなど想像します。(だからとって殺人は許せませんが)職場の中で疎外されていけないように人を育てていくことが大切でないかと思います。

【手をつなぐとなみ野 職員・保護者】

・野沢さんの「無理解からの差別は、心の理解があればなくなる」、「心を変えることは難しいが、少しでも理解をしてもらうことはできる」の言葉がよく理解できた。今まで忘れていたが、広げていこうと思う。寄り添うことを大切にしたいと思いました。

・とても考えさせられ、そして、福祉の仕事の大切さを感じました。いろいろな視点からの意見を聞くことができ、大変よい時間、勉強になりました。ありがとうございました。

・とっても有意義でした。

・心豊かな気持ちで利用者様と関わっていきたいと感じた。今後の関わりの中で指導や訓練をし、本人さんの訴えなどもっと気づき、支援の仕方を考えていく。

・「どうすればいいけ」ということを思って、常日頃支援することを改めて感じた。

・いろいろな意見を聞いてよかったです。少し意識が変わりました。利用者のこれからの支援に生かしていきたいと思いました。

・やまゆり園事件が起こらないように考えることができよかったです。

・大学ゼミ、裁判、グループホームを作るなどいろいろな事例とその良さが詳しくわかり濃密なフォーラムでした。ありがとうございました。時間が？

・学校プロジェクトがよかったですと思います。伝わりやすいと思いました。やまゆり園については、各パネリストの方の視点からの話が聞いてとてもよかったです。伝えることの重要性を改めて感じました。生きにくい人の存在をもっと知ること、アセスメント(特にポジティブについて)をしっかり行うことの大切さを感じた。

・きびしい社会で一所懸命に自分にできることをしている利用者の皆さん、いろいろな問題を抱えていると思う。今回のフォーラムでいろいろな問題を身にしみて感じました。いろんな福祉に関わる問題を風化させないでいきたい。今日は詳しく聞かせてもらいました。ありがとうございました。マイクの音が弱いためか、パネリストの声が聞き取りにくかった。

・専門の高い方々のお話だけあって、深い内容だった。「心の自由」、「生産性を生きる価値」等の言葉が印象に残った。

・この事件を通して「無理解・無関心」が差別につながることを知り、もっと社会へ、地域へ認識してもらう必要があると思いました。ポジティブな面を引き出したり、一人一人が落ち着いていけるものを見いだしたりとよりよい環境がで

きるよう、今後も努力していきたいと思いました。また、自分も幸せであり続けたい。いろいろな関係者と常にWin-Winの関係性をもっていきたい。

- ・久保さんの話は口調がやわらかく、わかりやすい。
- ・とても中身の濃いフォーラムでよかったです。やまゆり園では職員の虐待が報告されずに事件を起こしてしまった。何をすれば虐待に当たるのか？言葉の虐待では後は残らない。何か起こってからでは利用者が犠牲になってしまう。そうなる前に止めてほしい。職員のコミュニケーションが大事。いかに信頼関係を作っていくか。利用者本人の思いを大切にしてほしい。
- ・障害者と非障害者との隔たりのない共生社会を目指して、何をすればよいのか、いつも考えられるように気をつけるようにしたい。非常に勉強になりました。
- ・野沢さんの記者として活動してこられた話が面白かった。
- ・様々な立場から色々な意見を聞くことができ、とても参考になった。野沢さんの北海道のGHの事例では、現在自分自身は職員として利用者としっかり向き合っているか？と感じました。利用者の方々のそれぞれの個性に合わせた支援
- ・環境をもっと考えていきたいと改めて思いました。
- ・とてもよかったです、今日の話を理解してほしい地域・社会にどう伝えることができるのか。固い頭の大人に伝えるより、子供に変わってもらい、その子が社会で活躍される頃、住みやすい社会になったほしい。キャラバン隊の皆さんがんばってください。
- ・今日は色々な方の意見が聞けてよかったです。少し気が楽になりました。親がいなくなったので、姉妹二人で、心配しています。
- ・やまゆり園の事件後、私（子供は施設利用）や子供を取り巻く環境は目に見えて違ったことがあります。ソフト面は本当に面倒を見てもらい、感謝しているのですが、ハード面では、今まで簡単に出入りしていた玄関が施錠され、1回1回ブザーを押して入れてもらい、出るにしても1回1回声をかけなければ出ることができなくなりました。利用者も外で遊んでいる姿が見られなくて、とても残念に思っています。フォーラムは識者の話が聞けてよかったです。
- ・優生保護法、やまゆり園事件について、深く多面的に考えることができました。ただひどい事件だ、かわいそうに、だけではなく、意識しながらの活動支援が重要であると感じました。支援のヒントになるようなお話が聞けて役立ててくれたらと思いました。
- ・事件そのものが大変ショッキングだったのに対し、被害者が実名を控えたことによって、何か世間に早く忘れ去られるようで、とても残念なことだった、と思いました。
- ・基調講演もシンポジウムも聞き応えがあり、とても考えさせられた。無理解・無関心から少しの理解へ、キャラバン隊のさらなる活躍の場作り、活性化へ。「心は変えられない」にとっても共感した。野沢さんの「リアル」もとても共感できた。福祉職員の地位やレベルがもっと上がるといいなと感じた。
- ・都合で学校プロジェクトを観ることができ、皆さん上手に演技をされていました。是非続けてください。ありがとうございました。

- ・マイクのボリュームが小さかったのか、よく聞こえなかったとの声が多かった。
- ・我が子に当てはめてみても、先生の講演内容が当てはまり納得したし、改めて、子の存在の大きさがわかった。この子のいない生活は考えられません。ただ、親も子も年齢を重ねていくので、将来について今後考えていきたいと思いました。

【溪明会 職員・保護者】

- ・参加させてもらってよかったです。特に野沢さんのお話はわかりやすくとてもよかったです。
- ・非常に参考になった。できれば、もう少しマイクの音量が必要なかな。
- ・とてもいい講演会でした。
- ・4人のパネリストの実体験を聞き非常に感銘を受けました。障害者のリアル×東大生のリアルという本を是非読みたいです。
- ・職員として、意識、支援、立場など再認識しました。学校プロジェクトは障害者理解を進めるので、とてもよい取組だと思いました。私らも啓発活動の必要性を理解し、動きをしていきたいと思いました。
- ・今日の講演会に出席し大変感銘を受けました。今後に役立てていきたいと思えます。
- ・とてもよかったですと思います。
- ・この機会でしか聞けないお話で、感動した。
- ・障害者への支援のあり方、障害者の地域生活、地域での活動に対して、現実を振り返りながら、改めて考えることのできるよい機会だった。
- ・親が頑張らなくてはと思いました。職員の皆さんにお願いしたい気持ちでいっぱいです。
- ・支援職員として、利用者一人一人の思いを尊重し、クリエイティブな支援が求められていくのだなと感じた。保護者としての思い、メディア側のお思い、様々な意見が聞かれ、やまゆり園事件を風化させないことは難しいが、繰り返さないために自分にできることは何か考えさせられた。
- ・親として子と共に、これからも頑張ろう！穴田清さんの考え・思いに「力」をもらいました。
- ・大変参考になった。この問題の本質と再発防止のための課題とを色々と感じた。とにかく皆さんのパワーにもっと自分も何かをすべきと思いました。すべての生きにくい人を理解し、共生する命の大切さを大事にする。社会の中で、人々にとって心の豊かな未来の一助になりたいと思いました。
- ・今日は貴重な話をお聞きできる機会を設けていただきありがとうございます。毎日新聞の野沢さんが話されたある娘さんとの思い出の話を聞くと涙が出ました。やまゆり園事件を風化させてはいけません。ありがとうございます。
- ・親の熱意や協力の大切さを強く感じた。障害者に対する認識を社会に伝える役目を果たすべき行政のトップのやり方を批判された野沢氏に強く賛同できた。

まだまだタブーな部分がある世界だと思った。

・大変レベルの高い内容のフォーラムでした。障害者理解を地域の中で深めていく手がかりは、共に生きる人たちの一人一人の中にあると感じました。一步踏み出す勇気。

・パネリスト、それぞれの立場から意見をいただき、様々な考えがあるように思った。命の大切さは、障害・健常者に関係なく大事であると感じた。よい人を育てていくということがとても重要。生活しやすい地域社会になるとよい。色々な立場の人の思いや役割があると改めて考えさせられた。家族、職員、地域がいかに共生していくのか、難しいが、それぞれができる役割を担っていけばよいと思う。パワーをいただきました。ありがとうございました。

・命の大切さ、尊厳について改めて考えさせられた。

・難しいテーマなので、少し焦点がぼやけたようです。あとちょっと長かったです。ご苦労様でした。

・障害者差別の問題は地域住民の理解が必要であるとの内容にはとても賛同しました。支援者、学校の先生、保護者、地域住民が一体となって障害者への取組をしていかなければならないことが印象的でした。命の大切さをみんなで考えていく。人権擁護と共生社会の推進が大事。

・野沢さん、関哉さんの話に支援職員としての将来性を感じた。

・事件から自分で色々考えるきっかけになりました。働いて、それぞれの考えで利用者さんに関わっていて、自分の思いと違う場面も見ます。たくさんの知識と経験をもち、新しい価値を身につけていきたいと思います。そう考えるきっかけとなるフォーラムでした。

・今日参加して、とても考えさせられました。いろんな立場の方からのお話で、聞かれたことはよかったと思いました。私はやはり親亡き後のことが心配で、どうすればよいかなど、まだまだ心配や考えることがたくさんあります。

・講師の方からいろんな話を聞かせていただき、勉強になり考えさせられる機会でした。

・身近なところで現状・実態のどのようなフォローが大事であるかわかりました。今何が必要か……、今後のテーマが大事である。

・社会に対する啓発の重要性→社会を変えていく必要性。職員のアセスメントの重要性。人の命の価値、生きる意味……改めて感じ、考えました。村上先生のコーディネート力、さすがでした！感動しました！

・キャラバン隊について、解説中は演者の声が聞こえない方がいいと思います。

【となみ地域障害者成年後見福祉会(NPO)】

・人はなぜ人の目を気にするのか。共生社会の人になりたい。

・私は2003年(H15)に高岡地区社会福祉法人の中学時代の友達より富山市サンプラザの紹介で手をつなぐとなみの理事長さんとで会いました。勇気・体力

・知力に農力をプラスして支援して参ります。

・今日本当によかったー。次年度も是非やってください。待ってます。

・優生思想の良否ではなく「ある」というところから出発、その毒を抑える教育・思想を育てよ。生産性、経済性はどうでもいいから、命の尊厳の価値観の育成が重要。

・野沢先生の話がよかったです。

・久保厚子氏の基調講演後のプチ演劇がユーモラスがあり、堅苦しくない雰囲気醸し出されていてよいと感じた。個人的にパネルディスカッションの野沢和弘氏のお話が興味深く、印象深く心に響いた。

・地域に潜在する「生きにくい人々」と日々関わっている立場です。とてもわかりやすく野沢さんの「福祉支援者はクリエイターである」という言葉は心に響きました。無理解による差別を少しでも理解し共生し合える地域作りに変えていけるか、考えるヒントをたくさんいただきました。ありがとうございました。

・保護者の方や支援者が事件をどのように受け止めたかよくわかり、課題は多くありますが、色々勇気づけられました。（一番の課題は、自分自身の中に課題があるということ率直に認めることだと気づかされます。）

【他事業所 職員】

・フロア発言を重視したほうが良いと思う。（全体の時間配分を考えて）。久保会長が課題とされた問題について、もう少し議論してほしかった。穴田さんの思いはわかるが、せっかくの機会に他の発言者に気を遣ってほしかった。花束の贈呈は本人(利用者)にやってもらえばよかった。行政関係者の関わりが見られないのは残念。「人権」「権利」の最大の「よりどころ」の日本国憲法を「手をつなぐ」で特集してもらいたい。

・知的障害、精神障害、身体障害等、多くの分野があり、私個人、一般人としては、法律など詳しいことはわかりません。しかし、一人の「ひと」として捉え、尊厳を認めるのも人として当たり前認識をもつことの大切さを改めて感じる事ができました。本日はありがとうございました。

・とても充実していたと思います。ありがとうございました。

・とてもよいフォーラムでした。支援者としてがんばります。

・自分自身も日頃仕事場で障害をもった子と、自分自身を比べてます。今度から気をつけましょう。

・すごくよかったです。地域に障害者のことをリアルに知ってもらいたい。

・野沢さんのお話はいつも心に響くものでした。本当に生の声を聞けてよかったです。開催していただきありがとうございました。

・演劇は興味深く拝見しました。職員の方の熱意、素晴らしいと思います。見習わなければいけませんね。のりなどをとってきてもらうシーンですが、音声言語のみの指示では短期記憶の面から情報が消えてしまう方もいると思うので、メモを渡す、絵カードとのマッチングなどご本人がわかりやすい方法で伝えるといいのかなと感じました。

・無料なことに驚きました。有料でもいいので、レジュメがあればいいなと思いました。（有料でもいい内容だと思いました！！）いただいたチラシに終了予

定時刻が書いてなかったもので、書いてあった方がいいなと思いました。となみ野の近隣施設などの販売ブースがあれば、賑やかで楽しいのではないかなと思いました。（何を売っておられるのかな？と楽しみにしていたので）

・福祉方面でも老人福祉に携わっているものですが、自分にも講演の中にもありますように、偏見があるように思い、改めて考えさせられました。成熟した社会とは…の課題は重いものですが、教育が大切だと思います。キャラバン隊の活動は、第一歩になると思います。このフォーラムはもっともっと一般の人たちに参加してほしいと願いました。

・貴重な話が聞けてよかったです。強度行動障害を多く受け入れておられるGHの話が印象に残りました。

・風化をさせないのではなく、新しい風を！原点を踏まえつつ意識改革を！

・とても大事なフォーラムと感じました。フォーラムで語られた課題は、社会への厳しい問いだと思います。その問いをどのように社会の無関心な人へ伝えるか、あの手この手と伝える努力が求められるでしょう。時には笑いと共に！シンポジストの思いがとても強く、考えさせられました。是非これからも発信してほしい。

・大変有意義なお話を多く聞くことができました。事件は風化していても、この事件から得たことを通して明るい未来へ向かうことができるということは心に残りました。人を作ることの大事さを再認識しました。ご準備お疲れ様でした。ありがとうございました。

・風化させないためにはどうすれば…、考えさせられた。命の価値、命の大切さを考えさせられた。共生とは…、考えさせられた。

【その他】

・内容の濃いフォーラムでした。事件や事例等を契機とした差別解消等の啓発の取組は、気の長い活動が必要であると考えています。キャラバン隊など、先に形にこだわらないことから、啓発活動をやっていかなければならないと思います。（自らの活動を振り返っての思いです）

・大変考えさせられました。障害者の親ですが、まだまだ道は遠いのかなーと。

・とても衝撃的な事件から早1年半という月日が流れ、被害に遭われたご家族のみならず、未だ悲しみの癒えることなく、日々過ごしておられるたくさんの方がおいでになると思います。是非助け合いたいと思いました。そして何より、自分自身が言葉による暴力がないよう気をつけていきたいと思います。言葉の暴力は、必ずしも発しなくても思ったり考えたりしても同じことではないかと思いました。

・障害者であることがいやじゃなくなりました。入院生活が長かったため、人をうらやましく思うことがあります。今は体力がついてグループで生活して幸せだと思います。いい話が聞けてとてもよかったです。自分の人生について考えてみようと思います。ありがとうございました。

あとがきにかえて ～座右の本です～

久保会長の基調講演からパネルディスカッションまで4時間足らずの記録をまとめることができました。

膨大な量にびっくりしています。しかし、再度DVDを見ながら文字におこしてみると、たくさんの新たな気づきがありました。忘れていたことがよみがえってきました。振り返り・復習はやはり大切ですね。

それはともかく、4名のパネリストの皆様の、それぞれの立場からの意見は大変貴重なものでした。活動するための視点を広げていただいたり、意見の根拠をいただいたりしました。また、村上先生には、わかりやすくパネリストの方の意見を要約していただきました。おかげで皆さんの考えがストンと落ちて、納得することができました。

言葉足らずで、後書きよりも早く記録を読んでもいただくのが一番なのですが、親として、支援者として、匿名のこと、優生思想のこと、ネット社会のこと、差別の原因のこと、支援者の実践、命、生き方、今後の方向などたくさんの切り口がありました。内容については、ページをめくっていただきたいと思います。解答というか、ヒントというか、示唆というか、そういうものが満載です。

このフォーラムによって、勉強することができ、また、気持ちを強く持てるようになり、果ては、このことから活動を始めよう、自分はこうしようという決意にも似たものを得ることができました。これは、多くの方の感想と一致するものと思います。

今後は、この記録を座右の本に格上げして、疑問があつたら、悩んだら紐解く視界が開けてくる内容でもありますので、是非ご活用いただければ幸いです。

平成30年7月 発行

発行者

手をつなぐ育成会砺波地域連合会

社会福祉法人 手をつなぐとなみ野